伊能忠敬研究

季刊　史料と伊能図

二〇〇〇年冬季　第二二号

伊能忠敬研究会

表紙図解説

東京大学総合研究博物館蔵　最終版伊能中図（中部）部分

最終版伊能図は幕府から明治政府に引き継がれ、紅葉山文庫に保管されていたが、明治六年皇居炎上の際、大、中、小図のすべてが焼失したといわれてきた。伊能家から再提出された控え図（副本）も関東大震災のとき東大の図書館に保管されていて全焼したという。本図は来歴不詳で理学部の事務室にひどい状態で置かれていた伊能図を戦後襖仕立てに修復したものである。

関東は欠本で、奥州、中部、中四国、北九州、南九州の五枚と北海道二枚の七枚構成である。北海道の二枚は明らかに後世の写本であるが、他の五枚は完成度が非常に高い。来歴は不明であるが、地図の内容からみて関東大震災で燃えてしまったといわれている伊能家再提出の副本の一部分ではないかという気がしている。

地図合印は天測地点の☆も含めて完備しているし、描画、彩色、文字がしっかりしていて針穴もある。

測線は茨木大明神、能勢の妙見社に詣り、箕面滝にも伸びている。伊能隊は諸国の有名社寺にはよく詣っているが、関西は社寺が多く日記にも地図にも多数記載されている。西国札所の中山寺村では宿泊して天測を行っている。

（渡辺）

（題字は伊能忠敬の筆跡）

目次

（表紙写真解説）目次

巻頭エッセイ
研究会の二〇〇〇年以降の活動について　渡辺　一郎　1

研究ノート1
伊能忠敬宛江川英毅書状と伊豆測量（二）　仲田　正之　2

伊能古文書教室
伊能豊秋日記（四）　小島　一仁　6

史料紹介
伊能家文書紹介　十五
●二人の師　高橋至時と間重富（つづき）　安藤由紀子　10
●伊能忠敬の江戸在住日記　二　佐久間達夫　15

研究ノート2
伊能忠敬周辺の人々
——千葉県山武郡横芝町神保家資料等から——　加藤　時男　19
伊能図の色　浅井　京子　22
江戸・明治期の標準子午線の変遷から
伊能忠敬はなぜ京都標準子午線を用いたか？　吉田　正人　24

舞台劇「伊能忠敬物語」の上演　渡辺　一郎　29
お知らせ（二〇〇〇年の行事案内）　31
（裏表紙）英文目次

伊能忠敬研究会の二〇〇〇年以降の活動について

渡辺　一郎

フランスで発見されて伊能中図の佐原への里帰り展をキッカケとして結成した伊能忠敬研究会は、期待した以上の成果をあげて静かなる「伊能忠敬ブーム」を呼び起こしました。会員諸兄姉の御協力の賜と厚く御礼を申し上げます。設立後三年余を経過しましたので、今後の研究会の方向づけにつきまして先般アンケート調査をさせていただきました。それらをふまえまして、理事会で検討の結果、今後の活動方針をつぎのようにすることになりましたので御協力をお願いします。

一、研究会の活動は、伊能忠敬事績の調査研究と伊能忠敬の人物像の普及啓蒙を目標とする。目標実現のための具体的活動として、①定例行事の開催、②会報の充実、③積極的な史料収集などをおこないます。

二、定例行事としては、つぎのようなイベントを考えます。

ポスト伊能ウォークの中心イベントとして全日本歩測大会の開催　年一回

忠敬史蹟めぐり旅行会　年一回

定例発表会　年一回

総会は紙上総会または併催で開きます。伊能ウォーク期間中は関連行事を随時企画します。

三、会報を強化し発表誌と交流誌の二本立てとして隔月に発行します。

1．発表誌　「伊能忠敬研究」　年三回　六、一〇、二月発行　四〇頁

2．交流誌　「かわら版・伊能忠敬研究」　年三回　四、八、一二月発行　一六頁

四、忠敬史蹟めぐり

第一回として、忠敬出生地の九十九里から、青春の里・小堤を経て佐原までの東京発の一泊二日のバス旅行を計画します。車内、懇親会では会員から専門分野のお話を聞くことにします。（予定　二〇〇〇年九月八・九日）

五、第四回定例発表会　江戸東京博物館会議室　一一月予定

六、伊能ウォークへの参加

今年は伊能ウォークへのグループ参加地区を予めきめておき、有志の方にまとまって参加していただきます。役員も出かけて、宿舎などで交流できるようにします。

（わたなべ　いちろう・伊能忠敬研究会代表理事）

伊能忠敬宛江川英毅書状と伊豆測量（二）

仲田　正之

○　○

(4)二月五日付書状（文化十三年） 佐原市教委文書85－1－1

以手紙啓上仕候、追日春寒相催候得共御安泰被成御座奉恐賀候、然者當早春は早々御出被下、殊ニ珎奇之品御恵投被下、千萬忝添仕合ニ存候、小生義折節留守ニ而拝顔不相成、扨々残念至極奉存候、暫打續(カ)不得其意候間、此度出府之上者是非拝顔可仕品々相伺度儀も有之候間正月中御敷臺迄一寸被出候得共、其砌諸向廻勤多甚差急候間、乍残念手札而已差置候仕合、其後茂参上可仕思懸候處日々多用一向無寸暇、最早来ル十日頃ニ者出立帰郷仕候、此節日々罷出、適在宿仕候而も品々用多ニ而寸暇無之、参上拝顔之儀も不相成残念不少奉存候、去年中ハ豆州并海嶋為測量御弟子罷越、其節も御左右承知仕遠慕仕候儀ニ御座候

一小生儀兼々高門ニ入、測量推歩之事相伺度、勿論測量之儀者不容易儀ニ候得共推歩之義ハ兼々相好罷在、年々相推候得共改暦以来一向不相分、是等之儀茂御門下ニ入當暦之法原相伺度、勿論是者容易ニ御傳も被成兼候儀とハ存候得共何卒御内々相伺度存罷在候、孰れ拝顔之上可申上存罷在候處、右申上候通近日罷帰候儀故其儀難相成、扨々残念至極存候、何卒御文通ニ而可相分儀者御指揮被下候様奉願候、推歩之儀者定而司天官禁秘ニ可有御座候様之儀申上候茂甚恐入、兼々高名遠慕罷在候間不顧失敬此段申上候、品々申上度義御座候得共難尽筆紙先早々申上候、御免捨可被下候、以上

二月五日

尚以時候折角上儀(カ)可被成候、此伊豆海苔其微少ニ候得共拝呈仕候、微笑味可被下候、以上

本文推歩之儀者御禁秘ニ可有御座候得共書籍拝借相願候儀御座候、以上

伊能勘解由様　　江川太郎左衛門

「去年中ハ豆州并海嶋為測量御弟子罷越」とあることから文化十三年（一八一六）書状。早春（正月初）訪問を受け、品々頂戴したが面会ならず、その後正月中英毅訪問の際忠敬と式台で顔を会わせたのみ、このまま十日ころには帰韮、残念至極とある。江戸滞府中の書状。推歩については是非入門して勉強させて頂きたい。測量は容易ではないだろうが、推歩は前々から好んで勉強している、それでも改暦以後はさっぱりわからない、秘密もあるだろうが内々教授賜りたい、中々面会できないので手紙で教えて頂きたい、などと述べている。両者の交友が親密であるからこそ、入門願いたい英毅が手紙で教えてほしい、秘密の部分も知りたい、などといえるのであろう。

○　○

(5)晩春二十一日付書状 佐原市教委文書85－1－2

逐啓呉々も御書籍早速拝借被仰付辱奉存候、可成丈早々写取返上可仕候、以上

朶雪董誦時下暖和相成候處、御起居萬福大慰鄙情候、然者相願候暦象考成三冊解三冊拝借辱奉存候、写相済早々返上可仕候、此節小生甚繁多早速写取返上可仕奉存候へ共、少々日間も相掛可申此段何分御許容可被下候、先右之段申上度、早々頓首

晩春二十一日　　江川太郎左衛門

伊能勘解由様
高梧下
再白時下折角御愛自可被成候、當春中も態々茅屋御光来被下候儀小生折悪敷不在、扨々残念奉存候、いつれ其後拝謁萬々相伺可申候、以上

借用中の「暦象考成」三冊・解三冊の日延願い。早速写し取って返上すべきところ、御許容なられたし、という。二白で、「當春中も態々茅屋御光来被下候小生折悪敷不在」とあるので、(4)の二月に続く晩春（三月）書状、文化十三年のものとみて良い。また、「暦象考成」全巻が届けられているところをみると、同書上篇の下の借用を願った(3)晩春初四日書状の後をうけるものとみることもできよう。そうならば、(3)・(4)・(5)はすべて文化十三年中書状で、(4)→(3)→(5)の順となる。

○

(6)十二月六日付書状　佐原市教委文書85－1－3

呈鄙楮候、甚寒之節益御清寧大善不断(カ)奉存候、其後彼是取粉御疎遠罷過候、御免捨可被下候、然者推歩之事先達而相伺候外ニ尚又愚意ニ兼相分候箇條別帋相記相伺申候、何卒御指揮奉願候、一先年諸国之地図、官命ニ而御製被成候由、右之内ニハ豆州之地図も出来候儀と奉存候、右者御内々豆州之図計リ拝見相成間敷哉、定而官禁ニも可有之、容易ニ他見ハ不相成候へ共、極内々拝見相成候事ニ候ハヽ奉願候、先者右申上度呈小楮候、以上

十二月六日　　韮山江邇　拝

伊能先生
高梧下
再白時下厳寒御自愛可被成候、別帋推歩之内箇條相伺申候、何卒御教示奉願候、扨又近頃軽微之至奉存候へ共、御肴一折時下御見舞旁奉呈心掛候處遠国之事ニ而不任心底、因而方金三塊聊時候御見舞之寸志迄奉呈候、御叱納被下候ハヽ千萬本懐不過之奉存候、以上

推歩につき先の質問に加えて、別紙の不明箇条の教示を願ったもの。また、先年官命にて完成の諸国地図のうち伊豆国地図を内々借覧したい、ともいっている。書体は(1)に近く、内容的にもこの別紙箇条の一部である可能性が高い。

○

(7)臘月十九日付書状　佐原市教委文書85－1－4

呈鄙楮候、甚寒之節御座候處、倍御清寧被成御座珎重御儀奉存候、其後者久々御疎遠罷過候、失敬之段何分御免捨可被下候、當冬者小生出府可仕處、御用多ニ罷在、出府不仕、拝眉不相成残念奉存候、然者毎度御面倒之儀共相願恐怖不少御儀ニ奉存候へ共、考成後編推歩之中愚意ニ兼相分候處左ニ相記奉伺候、何卒御慈教被下候様奉願候

一暦象考成後編推歩之法、先達被仰下候通リ京師ハ里差一千四百四十分之七十五分即一萬分之五百一十〇分八三三江戸ハ里差一千四百四十分之九十一分半即一萬分之六百三十五分四一六六則京師里差ヲ相用氣應三十二日一二二五四と共ニ歳周三百六十五日二四二三三四四二江加入いたし、己卯歳三月十六日之日驟月離ヲ推(カ)、實望泛時前後両時各子正黄道実行ヲ求メ入交食甚時刻ヲ推算仕候處、実望実時二十〇時五十〇分四十一秒総減一分四十八秒、食甚距時加一十二分四十八秒、食甚時刻二十一時〇一分四十一秒、猶又里差七十五分即一時一割ヲ加入仕候へハ二十二時一十六分四十一秒即亥(カ)正一割ニ

相成即亥五割申候、推算誤候ゆへか引合不申候、右者月離推歩之時平行應最高應西交應之三数里差ヲ加減不仕ゆへ引合不申儀ニ茂御座候哉、此段奉伺候、何卒右之数之里差何程ニ候哉、御憐教奉願候

先達拝顔仕候寛政九丁巳年之下編月離之図解ニ太陰年根月孛年根正交年根何れも里差加減在之候間、後編推歩之節も同様ニ里差加減仕候儀ニ可有之哉と奉存候間、此段奉伺候、尤後編推歩之節者下編とハ数も違可申と奉存候、

何卒右里差京師江戸共何程と申儀を御憐教奉願度候

一京師江戸共北極高度分秒何程ニ御座候哉奉伺候、何卒是又御憐教奉願候

右之通相伺度、呈小楮候、毎度自由ヶ間敷儀共相伺恐怖仕候へ共、何分御慈授偏冀候、頓首

臘月十九日　　韮山江暹

敬白

伊能先生

高梧下

再白、時下寒威折角御自愛可被成候、呉々も本文之趣何分御憐授奉願候、扨又寒中御容躰相伺度、御脊奉呈度、聊寸志迄方金三塊拝呈仕候、御叱納被下候ハヽ本懐不過之奉存候、萬々再鴻之時可申上候、先之本文之趣相伺度呈短楮候、頓首

「暦象考成」後篇推歩の不明部質問状。(3)と同年かとも考えられるが、そうするとこれも文化十三年の可能性が高い。その場合、(4)→(3)→(5)→(7)の順となろうか。一太陽年を三六五・二四二三三四四二日とし、江戸と京都の里差に太陽・月の実行の誤差を質問したと思われる部分、江戸・京都の正確な緯度の質問、などもっとも詳細な質問状。以上のように、おおむね文化十三年を中心とした、書状類である。文化十三年伊能忠敬は七二歳、英毅四七歳。忠敬は翌々文政元年（一八一八）七四歳で没する。両者の交友がいつから始まったものかは不明であるが、忠敬の最晩年なかなか面会できない英毅が書状で教えを求めた雰囲気が伝ってくる。

二、文化十二年の伊豆測量

(8)伊能忠敬宛伊豆測量報告状　佐原市教委文書85－2－12

一筆啓上仕候、向暑之砌ニ御座候得共弥御勇健被成御座奉恐賀候、且佐原表ニ而茂妙薫様御始御安泰ニ可被成御座珎重奉存候、随而私共儀何連茂無事ニ相勤罷在候間、乍憚御心易被思召可被下候

一御弟子衆壮健ニ而不相替出精被相勤候間御安心可被成下候、棹取之外下々迄茂少之風邪当リ茂無御座皆々気丈ニ相勤居候間、是又御安慮可被下候、然者江戸出立後打続雨天勝ニ而晦日箱根越計天氣宣、朔日雨天ニ而三嶋滞留、且晦日三嶋泊之節嶋渡海船等之儀為聞合、江川太郎左衛門殿ゟ手代被差越候間、御雇船江戸廻し之積挨拶申遣し候、二日ゟ御用相始、北条泊ニ相越申候、北条ゟ韮山迄半道程打上仕候所面會致度旨手代を以被申聞候ニ付、書院江罷通リ何連茂面會致し、暫對話仕茶漬杯被振廻、叮嚀之挨拶ニ而有之候、尊君此度御出無之儀、且嶋々測量之様子等被尋且尊君江先年途中ニ而得貴顔、其後御留守勝チ故久く不得貴顔、御疎遠ニ相過候、此節御在府ニ候ハヽ近々出府致候ハヽ得貴顔可申旨楽ミ被居と申候、尤御用便之節御傳言申上呉

候様被申聞候

一時分柄殊ニ天城越等場所柄故兎角曇天勝ニ而星測茂甚六ヶ敷、漸く雲間相測候得共、下田街道筋三ヶ所程高低相極申候、下田着後茂打續曇天ニ而漸く十日夜快晴相測候処、旧測蜜合大悦可被下候

一天城峠ニ而嶋々遠測を楽ミ居候処、一躰樹木生い茂り見晴一向無御座、其上峠ゟ大雨ニ相成、梨本村迄幸にして漸く相測仕合、残念奉存候、御雇船茂当月三日下田湊江入津仕、日々私共着を相待居、途中迄船頭迎ニ出候間、早速順風之儀承候処、一両日者逆風ニ御座候得共俄ニ順風之程難計候間、御荷物積入方可致旨申聞候ニ付、一昨九日大抵之品者積入、当用之品而已ニ而下田最寄海辺側ニ相懸リ西之方吉佐美村江街道相測夫ゟ大加茂川打上ヶ海辺通り下田湊内測量ニ相懸、日々何連茂出勤仕居候、早々順風ニ仕出帆仕度夫而已祈居申候、当所難所申候城山鼻茂手茂無之測量相済申候

私共出立之節者被懸尊意為御餞別何寄之御品銘々江被下難有奉存候

右等之段申上度如此御座候、猶期後便之時候、恐惶謹言

五月十一日

門谷清次郎

坂部八百次

伊　勘解由様

永井甚左衛門

報告者は、天文方の門谷清次郎・坂部八百次。永井甚左衛門の三名。執筆者は指揮をとった永井甚左衛門と考えられる。下田より発したもの。日付は文化十二年五月十一日で、筆が丁寧であることから、島方渡海の風待ち中にできた余裕が感ぜられる。以下、要点を項目にひろってみた。

○　御弟子衆・棹取一同健康で出精している。江戸出立後雨天続きで、晦日（四月）の箱根越のみ晴天であった。

○　朔日（五月）雨天、三島宿泊。その節韮山の手代と渡海の雇船につき、江戸廻しの手配を依頼。

○　二日御用開始、北条泊（韮山町四日町）。この日、北条より韮山まで半道ほど測量して終ったところ、手代を通じ江川英毅より面会を要請される。

○　韮山屋敷書院へ通され、全員英毅と面会、茶漬など振廻われ、丁寧な挨拶であった。忠敬の出張がなかったこと、島々測量のこと、先年面会できたが、留守勝で中々御会いできないでいること、此節在府ならば出府の際御目にかかることが楽しみであること、よろしく伝言してほしいことなどが話された。

○　季節がらのうえ、天城という場所がらもあって星測も困難。下田街道筋は三ヶ所ほど高低を決した。

○　下田着後も曇天続き、十日夜ようやく快晴、測量したところ旧測（享和元年の忠敬の測量値か）と符号して、大悦。

○　天城峠での島々遠測を期待していたが、樹木が生い繁り、眺望がきかなかった。そのうえ、峠から大雨、梨本までようやく測量したような始末。残念であった。

○　御雇船は五月三日下田入湊、船頭が出迎えにきたので風順をたずねた。一両日逆風であるが、急に順風に変化するかも知れず、荷物積入れを勧められた。

○　五月九日荷物積入、当用の道具のみで、下田周辺海岸・吉佐美村への街道を風を待ちながら測量している。

（つづく）

伊能古文書教室・佐原伊能家史料を読む

『伊能豊秋日記』（四）

小島　一仁

祇園祭礼

忠敬は、伊能家に入夫して七年後、二四歳のとき、祇園祭礼に際しての町々の対立にかかわって、貴重な体験をしたことがあった。その本題に入る前に、佐原の祇園祭礼について、少し説明をしておきたい。

佐原は、利根川支流の小野川をさかいとして、東側の本宿と西側の新宿に分れている。祇園祭礼というのは、本宿の氏神である牛頭天王（もと祇園精舎の守護神、素戔嗚命の垂迹といわれている。現在の八坂神社）の祭礼で夏六月に行われ（現在は七月）、新宿では、秋八月に諏訪明神の祭礼が行われた（現在は一〇月）。

祇園祭礼のおこりについてはわからないが、一八世紀初頭の元禄・正徳期の様子については、忠敬の妻ミチの祖父、伊能景利が編集・記述した『部冊帳』の第九巻（『佐原市史・資料篇別篇（一）』所収）に「覚書」として記されている。説明を加えながら、その大要を記してみる。

佐原村本宿牛頭天王祭礼は、以前には、御神輿が氏子の町々をまわるようなことはなかった。毎年六月一〇日に御浜下りの祭礼（御神輿を小野川水辺に出してみそぎをすること）をつとめ、その日に御社へ入れ、また一二日に、御社の近くの岡野治兵衛という家の前に、青竹をまげ青蒲を敷いてそこに御神輿を出し、御神輿をかついで祭礼を行った。元禄一四年になって、六月一〇日の御浜下りから一二日まで仮の台をつくってそこに御神輿を置き、諸人が参詣するようになった。翌元禄一五年には、御仮屋がつくられてそこに御神輿がすえ置かれるようになり、その後「まく・のぼり・はた・榊・ちゃうちん・持弓」そのほかの祭礼の道具が、年々寄進によってできるようになった。御神輿は、正徳三年までは年々はやしたため（かついでゆすることであろう）大破に及んだので、正徳四年の夏、氏子が立ち会って修復し、はやすことはやめて、「獅子・母衣（竹竿の先に大きな袋状の布をとりつけたかざりもの）」などを出して祭礼を相つとめた。そして、この年から御神輿が町々をまわって御社へ帰ることになった。

この「覚書」によって、正徳四年（一七一四）から御神輿が氏子の町々を巡行するようになったことがわかる。また「覚書」中に「獅子」とあるのは、獅子頭をかぶった者が御神輿の行列の先頭に立って露払いをすることで、八日市場がこの役をつとめ、現在もむかし通りに行われている。現在の佐原の祭りは、御神輿よりも、立派な山車が引き出されるので知られているが、「覚書」には山車のことは全く出てこない。おそらく、そのころには、山車はまだつくられていなかったのであろう。

その後しばらくの間は、祭礼に関するまとまった史料は、ほとんど見当らないが、一八世紀中ごろの宝暦・明和期になると『伊能豊秋日記』が語ってくれる。『豊秋日記』には、毎年六月一〇日から一二日までを中心として祭礼のことが記されているが、ここでは、本稿主題の忠敬がかかわった〝事件〟を理解するのに必要と思われることだけ

記すことにする。

佐原村は、行政上、五つの組に分れていた。小野川東の本宿には本宿組・浜宿組・仁井宿組の三組、西の新宿には上宿組・下宿組の二組があった。それぞれの組には名主以下の村役人がいて組内をとりしまった。そして、村全体に関する問題については、五組の名主のうちから年番名主がきめられて事にあたった。各組は、それぞれいくつかの町をふくんでいたが、宝暦・明和のころには、本宿には八日市場・下中町・上中町・寺宿（上寺宿・下寺宿）・田宿・橋本・浜宿・河岸・荒久・仁井宿の一〇町があり、そのうち、八日市場・下中町・上中町・寺宿・田宿・橋本の六町は本宿組に属し、浜宿・河岸・荒久の三町は浜宿組に属していた。また、仁井宿組は、組とはいうものの、町並から離れた農村部であり、人口も少なかったため、その中に町々が形成されておらず、仁井宿だけの一町となっていた。なお、忠敬の屋敷は橋本にあり、伊能豊秋は八日市場に住んでおり、伊能家をしのぐ名門の永沢治郎右衛門の屋敷は河岸にあった。

御神輿の町々巡行は毎年行われていたようであるが、そのやり方や順路については、町と町、ことに浜宿組の河岸や浜岸と本宿組の八日市場との間に、しばしば対立があったようである。また、明和期に入ると山車が出るようになったが、現在のような専門の職人がつくったものではなく、各町で手づくりにしたものであった。それらは御神輿巡行のとき、そのあとに行列をつくってついていったようである。

明和六年（一七六九）に、山車の番次（引き出す順番）について本宿組の八日市場と浜宿組の浜宿・河岸が対立した。忠敬はその〝事件〟にかかわったのである。

「番次之論」おこる

毎年六月朔日に、各町の代表が参会して、その年の祭礼についてのとりきめを行うことになっていた。これを惣町参会という。その前日の五月晦日、「八日市場町中」から「三組御役人様」（本宿・浜宿・仁井宿三組の村役人）に対して番次についての願書がさし出された。次に、その原文と釈文をお目にかけよう。

史料の上でだしということばが出てくるのは、この願書が最初である。「去子年少々だし等町々ゟ差出…」とあるので、明和五子年にはだしが出ていたことがわかる。翌明和六年に、まだ番次がきまっていなかったことなどから考えると、だしは明和五年にはじめて出されたのかも知れない。

八日市場之儀は御存之通先年ゟ
村方御役人様被仰付
御神輿先払之獅子差出役掛ヶ
ニ而相勤来候而困窮町ニ御座候得共
相応入用相かけ凶年たりとも
　御神輿出之節露払之
役是迄勤来申候故、右例を以
去子年少々だし等町々ゟ差出
申候得共、私共町壱番ニ相立御
祭礼守備能相済申候、尤是迄
之通壱番ニ相違有之間敷候得共、
万一心得違も御座候而番次之論
出来候而御祭礼之差支ェも、
罷成申候而は悪気之毒千万ニ奉存、
何卒前々之通私共町壱番ニ
罷成候様被仰付被下候段奉願上候
畢竟是迄露払之役獅子相
勤不申脇町同前ニ御祭礼相勤
申候ハヽ、此度御願も不申上、如何様
共被仰付次第承知可仕処、前書之通
獅子だし共ニ壱番ニ罷成相勤
来候上、脇町ニ而も否哉有之間敷候得共
間違有之候而は迷惑至極ニ
奉存候ニ付、右之段奉願上候、何卒
先年之通被為聞召分、私共町
壱番ニ被仰付被下候様幾重ニも
奉願上候、以上
　明和六年丑五月
　　願人　　八日市場町中
三組
御役人様

―前略―

八日市場が差し出した願書は、一言でいえば、自分の町のだしを一番にしてもらいたいという願いである。その願いを惣町参会の前日に出したのは、他にも一番をねらっている町があるのを察知して先手を打ったつもりだったのであろう。村役人は、願書が出たので八日市場を一番にするつもりで、そのことを各町に伝えたところ、案の定、たちまち反対がおこった。まず、河岸が一番にしてほしいといい出し、つづいて、浜宿・上中町も一番になりたいと申し出た。こうして、「番次之論」がおこったのである。

忠敬、永沢氏と義絶

村役人たちは、右の事態を収拾することができなかったので、浜宿組の名主後見(名主の相談役)である永沢治郎右衛門と本宿組の名主後見であった三郎右衛門(忠敬)が取扱い(仲裁・とりまとめ)にのり出した。しかし、問題が解決されぬうちに、祭礼の日が来てしまった。

六月一〇日、各町ともだしは出さず、御浜下りは何とか無事にすますことができた。

六月一一日、番次がきまらなかったので、村役所から、だしはそれぞれの町の中だけで引くようにという触れがあった。しかし、その町の中だけでといっても、一旦だしが出るとなれば、そのきまりが守られるとは限らず、町と町のだしがぶつかって大騒動になるやも知れぬ。永沢治郎右衛門と忠敬はそれを心配して相談し、この際、だしは一切出さぬようにするのがよいということになった。治郎右衛門は、忠敬が本宿組の町々を説得してくれるなら、自分は浜宿組の町々をおさえて、だしは決して出さぬようにすると約束した。そこで忠敬は、本宿組の町々に事情を説明して、ようやく、各町から、だしは出さぬという約束をとりつけた。ところが、思いもかけぬことがおこった。

午後三時ごろになって、河岸と浜宿のだしが出て、天王御旅所(御神輿を安置してある御仮屋)へ、浜宿が一番に引き出した。これを見て、田宿・寺宿・橋本の行事たちが忠敬の屋敷へかけつけてきて詰問した。また、八日市場では若者たちがだしを出すといいはじめたので、豊秋はこれをなだめるのに苦労した。結局、忠敬はこの件に関して、八日市場と田宿・寺宿・橋本の三町に対して、「御町内だし引出申候義、差留置候所、治郎右衛門掛り浜宿・河岸両だし引出され候而、御町内並三町に申し訳けも無之」と詫びを入れた上、そのことを永沢治郎右衛門に伝えて「親類中義絶」した。

しかし、間もなく、伊能権之丞・伊能茂左衛門・本宿組名主藤左衛門・浜宿組名主五郎兵衛の四人が、この義絶の取扱いに入り、「町々之儀は此度間違い、私共四人に免じて了簡致し呉候様に」ということで、六月二五日夜、忠敬と永沢治郎右衛門の和談が成立した。

大谷亮吉氏は、右の〝事件〟について

「明和六年佐原祇園神社の祭典に際し、民衆紛擾を醸せし時村内の名望家たる忠敬並に永沢治郎右衛門分担して、これが鎮圧に当りしが、治郎右衛門の担当せし一団は却て紛乱を増大せしに係らず忠敬が説得せし一団は速に鎮静の効を奏せしが如き以て忠敬の才幹並に衆望の如何と窺ふに足るべき一例とすべきなり」

と記して、忠敬を称揚している。しかし、たとえ一時とはいえ、永沢氏と義絶せざるをえない立場に追いこまれた、当の忠敬にしてみれば苦い経験だったのではあるまいか。

翌明和七年には、だしの番次はくじ引きできめられ、引き廻しの順路も惣町の相談によってきまり、祭礼はとどこおりなく行われた。

伊能家文書紹介十五

二人の師　高橋至時（よしとき）と間（はざま）重富（つづき）

安藤　由紀子

先生たちに会うまで

伊能忠敬の「天文・測量への志」は、どうして、そしていつごろから、芽生えたのだろうか。もちろん、彼が有力者として三二年間の人生を生きた現場と、無関係ではないであろう。

佐原は、地元の古文書に、たびたび「一夜洪水之所」と記される。名主として、堤防の修築・川浚い・地境の引きなおし・橋の架け替えなどいろいろの仕事が忠敬を待っていた。いずれも計測の正確さが、要求される仕事である。こんな訳で伊能家には測量の伝統があり、小島一仁著「伊能忠敬」によれば、忠敬入夫以前に、測量技術書や数学書が揃えられていたという。

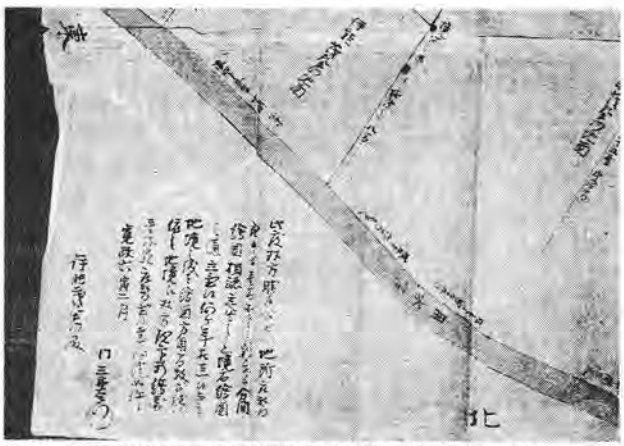
佐原は人口五千人を超える〝町場〟で、肩を並べられる所は、下総では今の銚子にあたる飯沼村しかなかった。

領主は六千石の上級旗本だった。忠敬が婿宛の書簡の中で「要求なさるままお貸ししていたのでは、本当に必要な時お貸しできなくなる。暮し向きについて、少しご意見申し上げた方がいい」といっているくらい、お台所はいつも火の車で、本音の部分ではまったく権威がなかった。ずっと江戸の佐柄木（さえき）町に住んでいて、年貢の取立てや借金の交渉に役人がときおり江戸からやって来るほかは、ふだん武士の姿を見かけない町場であった。

利根川流通の中心として江戸と直結し、経済活動の活発なこの町場では、自由な雰囲気があり、村民は「議定書」を作ってみずからをコントロールする一方、それだからこそかえって、なにかあれば黙っていない人々でもあった。とにかくびっくりするくらい訴訟が多い。「河岸問屋一件書類」などを見ていると、忠敬の一生は訴訟の一生だったといっても過言でないことに気付く。

「もめごと」こそは、実は測量に密接に結びついていて、田畑の境の引きなおしなどには、みんなの厳しい目が光っていた。

伊能忠敬記念館に保管されている、「伊能三郎右衛家文書」に『伊能三郎右衛門と同茂左衛門地所取替ニ付絵図』という寛政六年二月付けの図面がある。これを見ると忠敬は、隠居、出府一年以上前にきちんとした図面を書いていることが分かる。



伊能忠敬記念館保管「伊能家文書」　C－31

取り替えともなれば、特に正確さが要求されたことであろう。この図面の左下に自筆で『この度双方のみにて、地所取替えと決め、……立ち合いの上、境石を図面の通り立て置いた。今後何年経過しても、地境については双方この絵図の方角・間数に同意する。よって地境に双方捺印し、各一枚あて取り交わし置く。後の証拠のため。以上』とある。

こうして忠敬は、測量に大きな自信を持つようになって行った。

ベテランぶり

次の書簡は名宛人も日付もないが、右に述べてきたことについて参考になる。日付については、文中省いた所に、造酒に対する幕府の制限が一部撤廃されて「大安堵」というくだりがあって寛政六年、領主の役人が年貢の取立てに来ているくだりで十月ごろと推定される。忠敬隠居の前年である。名宛人は、文面から、江戸店を任している長女イネの夫「盛右衛門」と思われる。

史料　一

一三九　伊能忠敬書簡　千葉県資料・近世篇（抄録）

（名宛人・日付　記載なし）

（前略）

一　今日加藤忠司殿ご帰府、渡辺清蔵殿はこれから、年貢米お取立てのため逗留なさいます（二人は領主津田氏の役人）。江戸へ全部ご回米なさりたいと仰せでしたが、村役人たちは不承知で、もし先納金（つまり前借り金）をご返金なさるなら積み出しということになります。しかし特別、米の値段を高値にしてお渡しになりたいご様子です。まだお取立ても始まっていないので、どうなるか分かりません。

一両に付一石弐斗くらいなら、現金を江戸で都合して先納金をお払いなさって、米を引き取りたいお考えのようです。一石一斗四、五升程度（の高値）なら、村方払いにもなります。

村役人も一同決心、江戸へ全部回米のつもりはありません。弱いものには強く、強いものには弱いお屋敷さま（領主）のこと、いずれどちらかに決まるでしょう。しかしこの米の値段では、今年の暮れにはまたまた不足となり、お困りなさること、明白です。先達て申し述べた通り、この上のお取替えはご無用です。（中略）

先日お知らせしましたが、大黒屋久兵衛、伊勢屋三郎兵衛と名乗られる町人たちが、お供もいれて九人おいでになり、四、五日ご滞在、一日夜九ッ頃、急に出立なさいました。（中略）案内らしき者四、五人出入りし、義士討ち入りの様子もかくやと思われました。昨日は雨で、あの先どうなさったのかさっぱり分かりません。

多分、御小人目付か御普請方改役のたぐい（探索方）と思われます。追々御実名も分かるでしょう。

長逗留なので、町見・分見など（測量術のこと）お目にかけましたところ、大変感心なさり、「いままで見たこともない道具だ。伊能流をお広めになるべきだ」と言われ、測量器具を欲しいなどともおっしゃいました。出入り（訴訟、もめごと）三年の苦心も公になり、大喜びです。（後略）

領主の無力、村役人の強気、「出入り」の多さ、「出入り」と「町見術」の深い関係と、測量にたいする彼の強い自信が読み取れる。どうやら新工夫の道具も大分そろったようだ。

商人としての発想：第一の転機

こうした忠敬の自信は、名主としての、ちまちました村内ではなく、関東一円の測量へと目を向かわせることになった。

寛政十二年の第一次測量のための願書は、忠敬の学力の到達点と、彼の人生の総括を含み、味わって読んでみるとたいへん興味深い。その中で彼は次のように述べている。

「私は元来上総の生まれで、下総へ養子にまいり、米取引のためには常陸へも度々往来しました。上下総・常陸・安房には知り合いも多く、そこへ逗留して絵図を仕立てて見たいとかねがね考えておりました」

彼はすでに出府の十七年前、仙台と江戸を結ぶ流通の中心地佐原で仙台米を扱う米商人として、最初の妻ミチをつれて海路仙台まで出かけていた。「奥州紀行」という簡単な文章が残っている。

物見遊山なら、京都・伊勢あたりへ行きそうなものを、仙台米の来る道をすでに測量の目で見てきたらしい。その時の様子では、「測量に何の障害もなさそうだった」と右の願書に書いている。商人として、仕入先の範囲は、すべてその目で確かめてあったということである。

取引圏の地図を作ってみたいと思っても不思議ではない。

彼は言う。広範囲の測量でその精度を高めるには、「第一に北極出度（北極星の高度）、第二に方位を精密に測ることが必要」で、「私は若い頃から数学を好み、おのずから暦算も心がけ、ついには天文学も試みたいと思うようになりました。しかし村にいたのでは、なかなか思うように捗りませんでした」と述懐している。

年表ふうに：第二の転機

忠敬の第二の転機は、寛政二年、仙台藩医桑原隆朝の娘ノブを後添えにもらったことによってやって来たと、私は思う。これで彼は中央と結びつき、さらに広範囲の地図を作れる枠組の中に入った。そのことについて、以下年表風に、江戸出府までの彼の動きを追っていこう。

［寛政二年］

六月　仙台藩医、桑原隆朝の娘ノブを継室とした。仙台藩の御曹司だった天文方統括の若年寄・堀田正敦は、桑原の患者であり、彼を側近として扱っていた。天文方人事の内々の交渉は、前号でみてきたように、桑原を通じて行なわれていた。伊能忠敬はこれで、天文方と太いパイプで繋がったことになる。

年末　さっそく隠居願を出す。領主津田氏は許可しなかったが、彼は江戸へ出たくてたまらない。

［寛政三年］

九月　三か条の簡潔な家訓を書く。明らかに出府の準備である。

［寛政四年］

二月　津田氏、「勝手向き援助の功により」三人扶持を与える。忠敬遺留の意味であろう。

閏二月　江戸の盛右衛門に暦書を注文。この頃しばしば本を買っている。

史料　二

A二七一―八　伊能忠敬書簡　盛右衛門宛

世田谷伊能家文書

寛政四年（ヵ）閏二月十八日

追加

一　京都注文暦書之件

古暦便覧一冊、相届申候。

暦算啓蒙、当時切ものニて

来春出版之条

相分り申候。

一　律襲暦
一　観象暦
〃　　ニ部ハ
御注文御失念と存候。
今以不被仰遣候ハヽ。
一　授時暦俗解、中根元圭作
　　一冊
　　後巻三冊
〃　四冊と被存候。
一日ニ御注文被仰遣可給候。
御世話とハ存候へ共、当時
暦算ニかゝり居候間、無拠
申遣候。　（後略）

この書簡は、大谷亮吉著「伊能忠敬」にも引用されているものだが、本誌十四号では、川尻信夫氏が取り上げて言及しておられる。注文された本の中に『授時暦俗解』があることから、暦学を始めてまだ間がないころということである。しかし彼の学力が急速に進歩したことは、「蔵書中の『授時暦図解』という本に『この解誤り』『此迂遠也』などの批判的書き込みが多くあることからわかる」らしく、この手紙から三年後には、三段階のカリキュラムのうち第一段階（授時暦）は、佐原での独学で修了してしまったらしい。

またこのころと思われるが、新しい橋をかける件で「もめごと」があり、訴訟になった場合の結果について桑原氏から詳しい情報を得たらしく、「新しい橋は結局出来ないだろうと詳しくご説明くださり、大いに安心しました」という長女イネ宛の書簡がある。「出入り」についても、中央の情報を、彼は岳父から得ていたのだ。

【寛政五年】

二月　病弱なノブさんを佐原において、六月まで窪木清渕らと伊勢旅行をした。三ヶ月以上の大旅行だったが、やはり記録を残している。前の奥州旅行とちがい、途中しばしば測量・観測の記事が見られることから、どうやら磁石や望遠鏡を持参したらしい。遠くの岬や山頂の方位を測定しているし、夜、天測して緯度も推定した。日本全図を作るつもりはなかっただろうが、先に述べたように、関東と仙台まで（取引圏）の沿岸地図は念頭にあったと思われる。測量道具を持って伊勢参りをするなんて、尋常ではない。

【寛政六年】

二月　先に述べた茂左衛門家との土地取替えの図面をかいた。

この一年おノブさんは、ほとんど病気だった。その間忠敬は妻を送って江戸を往復し、桑原氏から磁石を借り、自分でも注文したりしている。

【寛政七年】

三月　ノブ、没。

五月　深川へ隠居、高橋至時へ入門した。

この入門のことについては、上原久著「高橋景保の研究」の中に、注目すべき記載がある。『小宮山楓軒の「懐徳日札」

には、次のように記されている。「作左衛門ハ大坂玉造組の同心ナリ。御旗本に召出サレ御目見以上ニナリ、其時ノ用意、槍大紋ナドノ如キ諸道具、皆勘解由（伊能忠敬のこと）ヨリ弁シタリト云フ」（中略、また紹介者については）直接にか間接にか、桑原隆朝の線を通じてではないかと考えられる』と、上原氏も書いておられる。

忠敬は桑原隆朝を通して、かなり早くから、堀田正敦の発案であった大坂の麻田流天文学者の呼び寄せを知っていたと思われる。期待を胸に、いよいよ江戸への出発である。

三段跳び

伊能忠敬の測量の企ては、三段階の飛躍を経てふくらんでいった。

1 名主として

水害の後始末ともめごとの解決を、名主として几帳面にかた付けていくうちに、測量の技術も進み、彼はその腕に確固たる自信を持つようになった。

2 商人として

商圏の測量を考え始め、そのために暦学から天文学へと、独学の輪をひろげていった。

同時に彼はノブとの結婚により、岳父桑原隆朝からいろいろな情報（至時・重富出府の知らせを含む）と便宜を得た。

3 測量家として

桑原氏を通じて出府間もない高橋至時に入門、カリキュラムの第一段階（暦象考成・上下篇）から、二人の先生をびっくりさせるような忠敬の猛勉強が始まった。

しかし、伊能忠敬の本当の目的は広い地域の測量にあり、天文・暦学はその手段だったのではないかと思われる節がある。

一年余の集中的な勉強ののち、彼は列島測量を夢想し始めたらしいのだ。『彼の大ぼら』について問重富に「どうお考えでしょうか」と尋ね、（多分「無理でしょうね」と諭されて）『自笑なさる』こともあったと至時宛ての重富の書簡は伝えている。

忠敬はこの夢想について、至時の留守をまもる重富に、たびたび訴えたのだろう。しかも京都へ出発する前、至時もさんざん聞かされていたように読める。『彼の』という言葉が、それを想像させる。大ぼらについては字の読み方に異説もあるが、広瀬秀雄氏はこう読んでこそ「筋が通る」と主張され、私もそう思う。

至時が京都へ出発したのは寛政八年九月だから、忠敬の蝦夷地測量（もしかしたら列島全体も視野に入っていたか）という壮大な夢想は、入門して一年三か月という短い間に芽生え、むくむくと大きくなっていったことになる。佐原時代に、その種は蒔かれたのにちがいない。

下総の地で、もう発芽していたのかも…と書くと、書き過ぎか。こればかりは、忠敬さんに聞いてみないと分からない。

（この項つづく）

参考文献

小島一仁　『伊能忠敬』　三省堂書店
「伊能三郎右衛門家文書」C三　伊能忠敬記念館保管
「伊能忠敬書簡」一三九　千葉県資料・近世篇
「伊能忠敬書簡」A二七一―八　世田谷伊能家文書
上原久　『高橋景保の研究』　講談社
保柳睦美　『伊能忠敬の科学的業績』　古今書院
有坂隆道　『寛政・享和期における麻田流天学家の活動』　創元社

伊能忠敬の江戸在住日記　二

佐久間　達夫

原本　忠敬先生日記　十九　　続き

文化三年（一八〇六）十二月十六日

朝雪。早朝郡蔵・寛平出立。午前まで降る。それより雨。四ツ頃松井町火災あり。熊井町にて小火あり。八ツ二三分頃より須田久米治郎へ罷越。暮六ツ半頃まで罷候得共「差控伺」沙汰なしに付雨中帰宅。五ツ二分頃に帰着。

十二月十七日

朝より晴天。四ツ後高橋善助来る。此朝坂部貞兵衛差控伺の儀、差控に及ばずよし仰せ渡され候よし。暮六ツ過ぎ組頭須田より使簡到来。

以手紙申入候。然者被申渡候。御用之儀有之候間、只今早々修理殿宅へ可被罷出候。尤、相組世話役差添候之様申達候間、只今早々可被罷出候。若、病気差合相候はば名代可被差出候。

十二月十七日

尚々、只今早々服紗小袖麻上下着用可被出候。世話役中にも只今自宅相越居候間罷出候様存候。御礼等之儀者、其節申談候様可致候。

追啓、只今修理殿より申来候間、手回し致し早々御越可有候。尤、服紗小袖麻上下着用、只今被出候様可被成候。尤、御礼回之儀、其節御談可申候。以上。

十七日　　須田久米治郎

伊能勘解由殿

御手紙拝見仕候、然者、只今早々修理殿御宅へ罷出候様被仰下奉畏候。速刻参上御請可申上候。以上。

十二月十七日

猶以、只今早々服紗小袖麻上下着用可罷出候様、是又奉畏候。以上。

伊能勘解由

須田久米治郎殿

請書飛脚へ渡し、即使へ同道にて須田へ罷越候所、玄関にて用人申され候に世話役野々山小右衛門殿にも最早佐藤殿へ罷出相待ち候間、直ちに佐藤殿へ御越成されるべく候様に申すに付、猿楽町佐藤殿宅へ罷越候所、世話係も待ち居り候。程なく佐藤修理殿御逢いにて仰せ渡し候。

伊能勘解由

其方差控之儀、牧野備前守殿御相伺候処、不及差控、以後入念候様可申渡旨、御同人被仰渡候。依之、申渡。

寅十二月十七日

それより立ち帰り御礼申し上げ、野々山小右衛門と同道にて須田門前まで。それより相別れ、須田へ御礼申し上げ、玄関にて書状相認め、下人長助を浅草へ遣し、伊兵衛相連れ、深川へ五ツ半頃に帰宅。

十二月十八日

朝より晴天。飯後浅草高橋氏へ罷越し中食致し、八ツ頃浅草より浜町秋山松之丞殿へ寒気見舞に立ち寄る。八ツ半頃帰宅。高橋善助来る。金弐両弐分婚礼祝成りを相渡す。

十二月十五日、浅草御役所にて申し渡され候書き付け

伊能勘解由弟子

平山　郡蔵㊞

右西国筋測量御用に付、昨今両年勘解由召連候処、左之通儀有之候由。

一、惣而賄方料理不好もの差出候砌者、彼是申立候儀も有之候由、既に長州阿武郡奈古村泊の節、最初差出候料理不相食候に付、又に仕直し差出候得共、彼是六ヶ敷申候に付、外弟子共差留し由。

一、所々にて買物いたし候砌、代料差遣候得共、価より下直に相払候事共有之候由。

問　重富より平山郡蔵宛の書状

平山　守氏所蔵

（以下略）

一、長州萩にて嶋々へ渡船之船用意手間取り間に合不申候儀有之候を憤り、煙草箱投出し候義も有之由。

一、防州辺にて屏風に張付有之候品を無理に所望いたし、其外書画等所々にて懇望致候義も有之由。

右之趣相聞不埒之至りに付、依之、勘解由永く暇これを申付ける。

伊能勘解由弟子

小坂　寛平

右西国筋測量御用に付、昨今両年勘解由召連候処、いかつが間敷義有之。其外食事等彼是六ケ敷申聞所之者及迷惑候義も有之。且、所々にて買物之代料差遣候得共、価より下直に相払候趣相聞、不埒之至に候。依之、勘解由方永く暇これを申し付ける。

稲生　秀蔵
尾形顕次郎
門倉　隼太

右西国筋測量御用に付、勘解由召連候処、御用先総而不取締之勤方之由、不調法之至り候。依之、急度相慎可罷居候。

伊能勘解由
坂部貞兵衛

右西国筋為測量御用相越候処、下部之者共何茂於御用先、所々より料理方麁末之儀有之候筋者、いかつに罵之、膳具等相損し、其外買物等押而下直に買取候儀茂有之候由相聞不埒之至に候。依之、銘々永く暇可被申付候。右之趣摂津守殿被仰渡候に付、申渡之。

十二月十九日

朝より晴天。飯後、桑原隆朝㊞、それより堀田摂津守殿、津田山城守侯へ寒中見舞に罷越。紺野町お玉ケ池、大久保竜太郎へ立ち寄る。九ツ半に帰宅。坂部貞兵衛来る。下河辺政五郎来る。八ツ半頃浅草より御使い。

厳寒、弥御安全目出度奉存候。然者別紙差上候。早々麻上下着用御差出可被成候。尤、貴君には不及候。書外貴面草々申述候。

十二月十九日　　作左衛門

東河先生
用事

稲生　秀蔵
尾形顕次郎
門倉　隼太

右之者、申渡儀有之候間、追付自分御役所へ可被差出候。以上。

十二月十九日　　高橋作左衛門

伊能勘解由殿

三人罷出候所、相慎みの儀御免仰せ渡され候。

十二月二十日

晴天。朝飯後より山鹿八郎右衛門へ罷越。それより中江原庭、大沢右京太夫屋敷に当時居る近藤重蔵殿へ立ち寄る。他行。会田算左衛門へ立ち寄る。浅草高橋氏へ行く。

十二月二一日

晴天。八ツ半頃より秀蔵、顕次郎、隼太浅草へ行きて夜に入って帰る。夜七ツ頃中嶋町火事あり。此度浅草婚礼あり。

十二月二二日

晴天。

十二月二三日

晴天。下河辺来る。

十二月二四日

晴天。

十二月二五日

大曇。小雪あり。組頭より廻状。牧野備前

守殿御渡し成され候御書付写し。左の通り。
一、橋取八男松平久之助死去に付、
公方様、大納言様、今日より定式半減之御
忌服被為請候事。
一、鳴物者、今日より明後二四日迄停止。
普請者不吉事。
右之通可被相触候。
以廻状申達候。然ば牧野備前守殿被成御渡
候御書付写、一通相廻し申候間可被得其意
候。廻状早々刻限を以順達留りより可被相
戻候。以上。
十二月二三日　　須田久米治郎[9]

此日四ッ下、深川亀久町家主平治郎店本間
半右衛門より相届き仲町川岸へ相送り候所、
山ノ手へ引越候由に付、本所三ッ目山川安三
郎へ相届。此日八ッ過、神保庄蔵来る。
十二月二六日
朝雨。午前迄。午後浅草へ行く。御扶持米
代金十七ヶ月分持参。
十二月二七日
晴天。
十二月二八日
天気好し。大工町へ寒気見舞へ行き直ちに
帰る。午前大野弥三郎来る。外より注文測器
内金五両渡す。外に金弐朱象限儀金具直し代
渡す。此夜雪。
十二月二九日
曇天、又雪、暫時降る。午後より天気。天
満屋八右衛門より年暮に密柑四五十来る。柾
板代を渡し遣す。佐原より白木屋掛故幸便に
書状。並に大鯉魚届く。

文化四年（一八〇七）一月朔日
晴天。坂部氏年礼に来る。白砂糖二函持参。
深更小雨。
一月二日
曇天。米屋新兵衛、天満屋八右衛門来る。
一月三日
晴天。風。午後浅草へ年始。それより吉田[10]、
山路[11]、並に下役衆へ年始。終て浜町秋山松之
丞へ同じ。七ッ後に帰宅。
一月四日
晴天。風。朝飯後より桑原隆朝、それより
林大学頭殿、佐藤捨蔵[12]、それより堀田摂津守
殿、それより須田久米治郎、佐藤修理殿[13]、津
田山城守殿、大久保竜太郎へ相廻り九ッ半頃
に帰宅。
一月五日
晴天。朝飯後小石川御箪笥町、即ち大塚入
口前にて岡村半平[14]へ年賀。当家にて中食。そ
れより牛込山伏町柳沢の前通り焼済坂野々山
小右衛門[15]へ相廻り七ッ前に帰宅。留主へ今井
友治、富田才兵衛来る。
一月六日
朝、朝飯後築地渋川主水それより赤羽根小
沢権右衛門[16]へ年賀。八ッ後に帰宅。午後曇る。
一月七日
雨天。浅草御用初めに行く。午後雨止む。
七ッ頃帰宅。
一月八日
朝曇。午前より晴。
一月九日
朝より晴。午後高橋氏来る。此夜、松田幸
太郎来る。
一月十日
朝より晴、午後より曇る。此日七ッ後門倉
清治引越す。
一月十一日
朝より晴。午後飛脚佐兵衛来る。粟生村飯
高氏よりホウボウ四つ。大鰯七十・一箒（ひとかご）来る。
高橋善助来る。間氏来る。
一月十二日
同じ。六ッ後坂部氏来る。
一月十三日
朝より晴天。下河辺来る。
一月十四日
曇る。高橋善助弁当持参。
一月十五日
晴天。鳥殿、金を下さる。門倉持ち来る。
一月十六日
同じ。下河辺来る。此夜坂部来て測量。
一月十七日
曇天。
一月十八日
曇天。七ッ頃坂部より返納包み作るの儀申
し来り候に付、門倉隼太、銀と金を遣す。当
明高橋善助来る。
一月十九日
朝より晴天。午前下河辺来る。

一月二十日
同断。永沢吉郎兵衛、仁井宿仁左衛門白砂糖一函持参。桑原翁来る。
一月二一日
晴曇。桑原氏に行く。
一月二二日　晴天。小普請組見回宮地弥十郎来る。浅草御役所へ行く。松江鳥殿屋敷へ行きて談す。
一月二三日
朝は曇。四ツ頃より晴天。此日赤坂御門内松平出羽守御屋舗へ行き、留主居木代久米右衛門へ去年測量御用通用の節御城下にて銀子贈り下さるの例をのべ、それより日比谷御門際松平相模守御屋敷へ立ち寄り、御留主居和田清守へ前同様に礼を述べる。尤、両家共に名札へ各礼を書き入れる。九ツ後に帰宅。去冬松平相模守留主居へ書状遣候返書を此所へ認め置く。
一月二四日
晴天。暮より曇る。高橋善助測量に来て止宿。

（次号へ続く）

注釈

⑦ 平山郡蔵（一七七八～一八一九）
平山郡蔵は、伊能忠敬の妻ミチの母親「タミ」の生家である南中村（現多古町南中）の平山季孝の子で、幼名を五郎作、家督相続後、藤右衛門季恭と称した。少年時代、佐原の伊能家に寄食し、忠敬から算術を学び、久保木清淵から漢学を学んだ。
第二次測量から第四次測量までは、副隊長格として忠敬を助け、測量並びに地図作製に励んだ。幕府の直轄事業となった第五次測量のとき、旅先で不埒な所業があったという理由で江戸に帰着後内弟子の小坂寛平とともに破門された。
以後郷里に帰っていたが、文化十四年末に忠敬は天文方の高橋景保に願って破門をといてもらい、姓を平野と仮称して文政元年から大日本沿海実測地図の作製に従わせた。
しかし、地図作製の途中病気になって帰郷し文政二年十月二十七日、四一才で他界する。法名は「蓮徳院日栄」という。墓石は南中の平山藤右衛門家の墓地内にある。
平山郡蔵を含めた内弟子の破門・謹慎の経緯についてはわからないことが多い。次に郡蔵破門についての記録を記して参考に供する。
。高橋景保測量御用日記（高橋景保より堀田摂津守への口上内容）伊能忠敬記念館蔵
委細尊命之趣、難有奉畏恐入候儀に御座候。（略）昨丑春出立の節、勘解由は勿論、下役共善助迄堅く申付遣被候上、是等の者共遠国御用の趣意も粗存居候もの共にて候間、不取締の仕方決而仕間敷、全く弟子共、並下部の者の所為と奉存候。其上弟子共下部のもの等は、いずれも田舎者にて、ややもすれば御用を権威が間敷奉存候。勘解由儀も、久来より御家人に無之候得ば、外の御家人少しく心意も違い、上の御様子精しくは不奉存。（以下略）
。間重富より平山郡蔵宛の書状（郡蔵への戒めの手紙）　平山　守氏蔵
此の書牘は内々申進候に付、御覧後、火中に可被成候。若し他見候ては甚くあしく候間、第一に此の儀御承地の上にて御覧可被成候。
惣て測量の儀は御存之通、天文に相掛り候儀に付（略）。前に申入候通に下役中の儀は御奉公人に付、何事も其々の役だけの勤を仕来り、物事心実に夜にも夢にも其事を思い大成いたし候程には心がけ不申候。其ゆえに定て貴様の気に不入候事多く可有之候。
然るに去夏以来、市野事病気と申立帰府被致候所に急度病気にもなく早速に全快にて御役所にも出勤のつもりに相成候。其節も被是やかましく、且又、伊能子よりも立腹の趣被申越候（以下略）

⑧ 桑原隆朝（一七四四～一八一〇）
桑原隆朝養純は忠敬の三人目の妻ノブの父で仙台藩の藩医。
⑨ 須田久米治郎　小普請・佐藤修理組の組頭。
⑩ 吉田　高橋と同役の天文方吉田勇太郎。
⑪ 山路　同　山路才助。
⑫ 佐藤捨蔵　佐藤一斉のこと。
⑬ 佐藤修理　小普請支配。
⑭ 岡村半平
⑮ 野々山小右衛門
⑯ 小沢権右衛門
いずれも小普請・佐藤修理組の世話役。

伊能忠敬周辺の人々
――千葉県山武郡横芝町神保家資料等から――

加藤　時男

伊能忠敬の実父が千葉県山武郡横芝町小堤の神保貞恒であることはよく知られている。貞恒は神保家から同じ山武郡九十九里町小関の小関五郎左衛門の娘みねと結婚し、小関家に婿入りしている。そこで三治郎、のちの忠敬が生まれるわけであるが、母親みねが早逝したため、父貞恒は小堤の実家に寄留し、のちに分家する。残された忠敬も一時期小堤に寄留しており、何かと神保家との由縁も深い。

そもそも神保家は、戦国末期、小田原北条氏配下の武将坂田城主井田氏の宿老として勢力のあった中世以来の豪族であった。しかし天正十八年（一五九〇）北条氏滅亡後、井田氏は常陸に逃れ、神保氏はこの地に土着、帰農している。このような神保誠家には多くの古文書も所蔵されており、そのうちの「井田氏関係文書」「小堤村明細帳」などは『千葉県史料諸家文書　中世編』（昭和三十七年　千葉県史編纂室発行）『千葉県史料諸家文書　近世編　上総国　上』（昭和三十六年千葉県史編纂室発行）に収録されている。

私は昭和六十年代に地元の高校で教鞭を執っていた時期、その高校に神保家の子息が在籍しており、そのクラスの歴史の授業を私が担当することになった。そのことを契機に神保家文書を披見する機会をもった私は、同僚と共に昭和六十四年一月、はじめて神保家を訪問し、神保家文書を拝見した。文書は「井田氏関係文書」など一部巻物化されていたが、殆んど未整理であり、目録化もされていなかった。調査してみると、既に知られている文書にまじって懐紙、短冊などの文化資料の存在が判明した。これらの資料は従来の歴史研究者の全く触れなかったものであるが、偶々私の関心を持っていた俳諧資料をそこに見出すことになった。

即ち、江戸の俳諧師白井鳥酔の懐紙である。鳥酔は千葉県長生郡長南町の出身であり、享保期に唱えられた「蕉風復興俳諧」の担い手の一人でもあった。その鳥酔が明和三年（一七六六）、故郷の地引村（現長南町地引）から銚子にむけて行脚する旅の途中で神保家に立ち寄り書き残したものであった。しかも、その懐紙には同行した加舎白雄―信州上田出身の俳諧師で「西の蕉村、東の白雄」と並び称される天明復興俳諧の担い手―が、約二十年後の天明四年（一七八四）再び神保家を訪れて添書をしている次のような懐紙であった。

過同社夜松亭
この亭也往し仲冬火の災にかゝり矢も通らぬ四隣の樹々いろをかへたり、まことに行水の流れはたえすしてしかももとの水にあらぬ世の変化たり、驚くへからすと、ちからをつけて
落栗の三とせの
うちにもとの庭
丙戌仲秋　　鳥酔

ふところ紙にしるせし真蹟はたとせを経て此家に拝す、遺章のことくもとももとの庭なるをや、主人の索に応して
天明四年春二月　　白雄書

神保家に立ち寄った鳥酔が、火災に遭遇したばかりの門人夜松―忠敬の従弟―を励ましたものであり、その約二十年後に訪れた白雄が、師鳥酔の懐紙が大切に保存されていることを喜ぶと共に真筆であることを証明し、鳥酔の予言の如く神保家の復興しているさまを祝ったも

のである。

この発見を契機に、俳諧史の研究者である立教大学教授加藤定彦氏により俳諧資料の本格的調査が行なわれた。その調査結果は、「矢さしが浦の俳諧―夜松関係資料の紹介―」(『近世文芸　研究と評論　第三十七号』早大文学部神保研究室発行　平成元年)や「矢さしが浦の俳壇―伊能忠敬をめぐる俳人たち―」(『千葉県の歴史　第四十一号』千葉県発行　平成三年)などに発表されている。これらの研究により父貞恒をはじめ忠敬周辺の人々が、鳥酔、白雄系の俳人として俳諧をよくしたことも判明した。次にその関係系図と俳号を示し、短冊、懐紙のなかから発句を紹介しておく。

四十九をぬけて嬉しや今朝の春　梅石

玉棚や釣るに連しもきのふけふ　都船

蚊遣り焚てうかがふ母の寝顔哉　夜松

わかれてもまた見む菊の其日かな　吟松

残念ながら忠敬が俳諧を嗜んだと思われる痕跡は発見できなかったが、忠敬と神保家の深い絆を示す資料として、九代信敬についての忠敬直筆の「命名書」が発見された。そこには「信敬」の由来を論語により次のように記してあった。

信敬　帰納　生

論語曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣、言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉

又曰、道千乗之国、敬事而信、節用愛人、使民以時

伊能忠敬

印印

この他には忠敬の神保家宛書簡など直接の資料はなかったが、明治期に忠敬が新政府から贈られた「位書」の写しや、贈位についての佐原伊能家からの祝宴案内状など数通の書簡があった。なお、忠敬書簡も一通発見されたが、神保家宛ではなく、明治期に佐原伊能家から贈呈されたものと推定される。

次に九十九里町粟生の飯高家文書(いわし博物館所蔵)にある飯高惣兵衛(号灞陵)について紹介する。灞陵は忠敬と「莫逆の友」であったとされているが、飯高家と灞陵については、本誌「第二十号」に寄稿した木島里八氏の研究ノート「測量中の伊能忠敬に贈った飯高惣兵衛の漢詩について」に詳しい、灞陵は俳人としては加舎白雄の門下であり、神保家の人々とも親しく交流し、「漢詩集」と「句集」の二分冊からなる『灞陵集』の「句集」序文は白雄に依頼している。また、先に紹介した天明四年の白雄の神保家訪問の直前に灞陵のもとに立ち寄っていることも次の飯高家文書「天明四辰年正月、用留一、飯高惣兵衛」の記事によってわかる。

閏正月廿六日　白雄坊曽我野より来

二月六日雨　白雄屋形へ参

灘陵のもとにしばらく逗留した白雄は、二月六日に屋形村（現横芝町屋形）の、おそらくは海保瓜州のもとに立ち寄り、そこから神保夜松のもとに行ったのであろう。この「用留」には灘陵が神保家を訪問し、貞恒にも面会している記事や佐原伊能家に逗留する記事も散見される。以上のように山武郡の忠敬周辺の人々は俳諧をよくした文化人であった。

なお、これらの「神保家資料」や「灘陵句集」鳥酔の「紀行記」などは現在刊行中の『千葉県の歴史　資料編　近世（上総）』（千葉県発行）に採録を予定している。

最後に東金市押堀の高宮啓明家資料についてふれる。高宮家は大谷亮吉著『伊能忠敬』などにより、忠敬の孫二人（いねの娘）が相ついで嫁いだとされる家である。はじめ妹の秀が嫁いだが早逝したため、のちに姉折枝―婚家先で夫をなくしていた―が再婚したと云われている。御当主からの伝聞によると、折枝が再婚の際に持参したとされる「茶道具」と「服紗」も保管している。また仏壇には姉妹の位牌と御当主の推定する女性二人の併記された次のような位牌もあった。

	如実院妙相日真信女	弘化2・30才
五代	徳見院是相日項信士	明治14・74才
	徳実院妙功日相信女	明治13・69才

しかし、位牌の没年、年令から推定して、この二人を稲の娘とするには疑問が残る。この辺の事情については『九十九里町誌　各論編下巻』（平成四年）において田村敬氏が詳しい考証をしている。

なお、昭和十二年に忠敬の生地、九十九里町小関に徳富蘇峰の筆になる「伊能忠敬出生の地」と刻まれた記念碑が建立されているが、碑の側面には賛助者として、稲の子孫（養子）稲生氏五代目稲生勘兵衛と押堀の「伊能家婚戚高宮三雄」として二人の名が刻されている。高宮三雄とは高宮家先代であり、高宮家と忠敬に由縁のあったことは間違いなさそうである。

このような高宮家から昨年（平成十一年）大量の古文書が発見された。調査を依頼された私は、千葉県文書館、千葉県史料研究財団の協力を得て整理、調査中であるが、約三千点（推定）の古文書は近世から明治期にかけてのものが大部分である。現在のところ忠敬関連のものは発見されていないが、調査終了までには何らかの発見を期待したい。

（かとう　ときお・千葉県文書館古文書調査員）

＊＊＊＊ 伊能図に使用している〝色〟に関して

〈色料〉 日本画の着色材料は、大きく顔料（無機物と有機物がある）と染料（動物性のものと植物性のものがある）に分類できる。顔料は水に溶けず、染料は水溶性である。なお、植物性染料を石灰などに吸着させて顔料としたものをレーキ顔料といっている。（二二頁 ※1）

〈黄色について〉 藤黄は現在ガンボージとも呼ばれる染料系色料、雌黄は砒素の黄色硫化物。『本朝画法大全』（土佐光起・一六一七～九一）など江戸時代の画家による画法書によれば、雌黄より藤黄がよく使われている。伊能図の鮮やかな黄色、藍と混合する黄色は藤黄と考えていいのではないだろうか。なお、黄土は多様な色目をもっているが、藤黄・雌黄のような透明感のある明るい黄色ではない。（二三頁 ※2）

伊能図の色

浅井　京子

「伊能図」は、華やかできれいな地図です。山の緑に誘われ、赤い測線をたどってなじみの地名をみつけていくうちに虜になってしまうのでしょうか。でもよく見ると地図そのものの部分にさほどたくさんの色数を使っているわけでもないのです。

「伊能忠敬記念館の青木司さんが、伊能図に使われている絵具を調べたいといっているのだけれど、ちょっと時間を作って！」こんな伊能陽子さんの電話からこの話は始まりました。

青木氏の疑問は、

① 伊能図の着色材料は何か

② ことに山を表わす緑色は地図ごとに微妙に変化しているのはどうしてか（描き方の違いを想定し得るのか ―― 記念館'99年度年報を参照）ということでした。

「九州東部・南部中図」（文化八年版　東京国立博物館蔵）には、地図合印と書かれた凡例が付いています。国名・郡名・国界を表わす印からはじまり、最後の方に○山岳艸木・○海川・○田地霞・○砂濱とあります。それぞれの○には緑色・青色・褐色・黄色が塗られています。これはほとんどの伊能図に共通する配色です。ただし緑色は図によって、青味が強くなるか、いわゆる緑色か、黄緑色となるかの違いがあります。また霞は灰色の場合と赤味を帯びる場合があります。これに交会法の目標とした島や山岳からの赤色の線が走り、同じく赤色の測線、測線に沿って墨書きの地名が入っていきます。

伊能図は基本的に日本の正確な形を図にすることでもあったわけですので、海岸線をたどった測線の赤は海の青に縁どられ、青と赤の間に黄色が配され、そして山々に緑が塗られます。緑を主調として、青・赤・黄の三原色がみごとに対応しあっているともいえます。

電話に応じて伺った世田谷の伊能家で、私が確信をもって答えられた色料名[*1]は水を表わす青色が岩絵具の群青ではなく染料系の藍であることだけでした。測線の赤色は多分朱（辰砂）、緑色は緑青ではなくて藍と黄色を混ぜて作っているけれど黄色の色料名がわからない。黄土はこんな鮮やかな黄色にはならないだろうし……ということで、武蔵野美術大学教授の三浦耐子氏に教えていただくことにしました。とりあえず私が伊能家所蔵の絵地図（伊能図とほぼ同時期のもの）をもって、大学の日本画研究室を訪ねました。

この地図には左記のような凡例がついています。

〈色料名〉

[緑色]	山野	・藍と黄色
[青色]	海川	・藍
[黄色]	田畑	
[ピンク]	人家町	・洋紅か臙脂に胡粉
[白色]（墨線丸の中）	寺	・胡粉
[白色]（墨線四角の中）	社	・胡粉
[赤色]	道路	・朱砂（辰砂）
[白色]	塩濱　沙濱	・胡粉
[茶色]	領違	・代赭（たいしゃ）

三浦氏は、成分やそれらの色の持ち味などを説明しながら黄色以外の色料名を右のように特定されました。さて問題の黄色です。黄色は

色料名として藤黄（ガンボージ）・雌黄・黄土が考えられます。鮮やかさからも藤黄か雌黄と思うが、黄土も多様でその可能性も無視できず結論を後日に持ち越すことにしました。

この結果を青木氏に連絡したところ、やはり伊能図を実際にみてもらった方がいいということになりました。十月中旬、記念館に伊能家から寄託されているものの中から四点の伊能図（下図〈三厩付近〉・大図〈函館付近〉・中図〈橋立〜三国付近〉・小図〈東日本の沿海地図〉）を持参した青木氏と再度、武蔵野美術大学を訪れました。この日は、三浦氏とともに、同校教授滝沢具幸氏も同席して下さいました。そしてタイプの違うこの四点の伊能図を順に拡げ、ルーペ（二十倍前後）を用いながら色料名を考察していきました。さらに滝沢氏は特定したいくつかの色料を絵皿にといて、紙につけてみせてくださいました。筆を自在に使われながら青木氏の質問に答えて、測線はフリーハンドで引いているだろうこと、大画面の地図制作の時には今と同じように乗り板にのって描いているだろうことなどもお話し下さいました。

この結果をまとめると伊能図の色は左記のような色料名を宛てることができます。

海川――藍
山岳――草汁といわれる藍と藤黄の混色※2
砂濱――藤黄
田地町並――代赭・朱土・黄土
測線など――朱砂（辰砂）
霞――墨、赤味を帯びた霞は墨に臙脂を加える

ここで注目されるのは、コンパスローズには使われている緑青・群青といった岩絵具は地図の本体には使われず、草汁（藍と藤黄の混色）・藍が使われていることです。染料系の絵具を使う方が制作する時も、地図として完成した後の扱いも楽だったためでしょうか。紙にくいついた染料系の色は岩絵具による色面のように剥落の心配はありません。ただ伊能図におけるコンパスローズの華やかさは格別で、合印という現実的な役割りをこえて、伊能図の見どころの一つになっています。おそらく単純なものから複雑・華麗に変化していると予想されますが、詳細は今後の研究に待ちたいと思います。

最後に霞についてです。霞といえば平安時代の絵巻などにおいて、霞からとびだした山頂で山の高さを際立たせ、風景の途中にかかって遠近感を強調したり、また、画面転換の道具として使われてきたことが思いおこされます。そして古代から近世へ、日本絵画の構成要素の一つとして様式的な変遷を示しています。

伊能図では測量したところだけが図にされていくので、空白部分ができます。交会法の目標に使った遠くの山岳と測線付近の山々の間には霞が配され、測線の周囲から内陸へのフェイドアウトにも霞が使われます。霞によって空白の部分が、何も描かれない白い部分ではなく、見る者が自由に想像可能な空間に変質させているといったら、いいすぎでしょうか。

貴重な時間をさいて、日本画顔料（染料系も含めて）の講義をしてくださった滝沢具幸氏・三浦耐子氏、伊能図を絵画的側面から考えるきっかけを作ってくださった青木司氏に感謝いたします。

（※印の用語については二一頁を参照のこと）

（あさい　きょうこ・富岡美術館学芸課長）

江戸・明治期の標準子午線の変遷から
伊能忠敬はなぜ京都標準子午線を用いたか？

吉田　正人

「伊能忠敬はなぜ京都標準子午線を用いたか？」ということに興味を持ったのは、日本国際地図学会によって復刻された「大日本沿海実測図～伊能中図」を見たときのことである。そこには京都の南北に黒々と子午線が引かれ「中度」と書かれていた。英国のグリニッジを起点とする国際標準子午線が採択されるのは、一八八四年のことであるから、伊能図に明石を一三五度とする子午線が引かれていないのは当然のことだが、幕命によって作成した地図の標準子午線がなぜ江戸ではなく京都を基準としているのだろうか？

一、伊能図以前の標準子午線

海外の世界地図の中に日本がどう位置付けられているかを遡って調べると、一五九五年のオルテリウス図には既に経緯線の入った日本地図を見ることができる。当時、英国基準の標準子午線はヨーロッパにおいても確立されておらず、陸地のない大西洋（カナリー諸島付近）を起点としている。江戸時代の日本を訪れた博物学者として有名なケンペルも、一七四〇年に発行した「日本誌」の中で、京都を東経一六五度とする大西洋基準の経線を用いている。

ロシア船の来航が頻繁となる十八世紀末から一九世紀初頭にかけては、海外の世界図を翻訳し、その中に日本を位置付けようとする試みが盛んになる。このような翻訳地図では、大西洋基準の経線がそのまま持ち込まれている。一七八五（天明五）年に林子平が国防の緊急性を警告した「三国通覧図説」中の「三国輿地路程全図」では京都が東経一六六度、一七九四（寛政六）年に桂川甫周がロシアに漂流した大黒屋光太夫の話を記録した「北槎聞略」の付図では日本が東経一四五－一六〇度の間となっている。

英国基準の標準子午線が用いられるのは、この後からであり、一八一三年のクルゼンシュテルンの「世界周航記」中の地図では、日本は英国基準東経一二九－一四三度の間となっている。

わが国において、はじめて経緯線を記入した地図は、長久保赤水の「改正日本輿地路程全図（一七七九・安永八年）」であると言われるが、すでに森幸安の「日本分野図（一七五四・宝暦四年）」には経緯線が引かれている。

森、長久保らの地図上の経緯線を仔細に観察してみると、京都を通る子午線を基準に東西に一一本の経線、同じく京都を北緯三五度としてそれを基準に南北に一二本の緯線がひかれている。森、長久保らの地図には、子午線に数字がふられておらず、標準子午線がどれであるかは明記されていない。しかし、江戸にはない子午線が、京都にははっきりと引かれており、京都を基準としたと思われる。

森幸安の「日本分野図」の解説には、「日本中央之処北辰出地三十五度去赤道示三十五度自其東極至西極径度相互十二」「日本薩摩南辺三十一度許至東奥津軽南部辺四十余度」と記されおり、すでに地球上におけるおおよその日本の位置が理解されていた。

長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」の解説には、「大既（ママ）二十二里程隔ハ天ノ一度ヲ違フ故ニ北極星ノ高低ニ従ヒ南北ノ度数ヲ知リテ東西ハ準知スベシ日輪一時ノ間三十度ヲ過グ東海ヨリ西海マデ天道十度違フ」と書かれ、伊能忠敬が実測した二八・二里より過大に見積もられているものの、子午線一度の距離にまでふれているのは興味深い。

森、長久保の地図は伊能図とは異なり実測図ではなく、経緯線も投影法を考慮せずに格子状に引かれたものである。そのため標準子午線も、多分に観念的にならざるを得なかったが、それなりに当時の天文学的な知識を反映しようと意図したものであることがわかる。

二、伊能図における標準子午線

伊能図における子午線の変化を見ると、第四次測量以前の成果をまとめた「蝦夷地小図（一八〇〇）」から「東日本沿岸小図（一八〇四）」までは、測量の基点である江戸を基準とした子午線が引かれている。

第五次測量の成果として、一八〇七（文化四）年に作られた「近畿中図」にはじめて京

表１　江戸・明治期における標準子午線の変遷

西暦	和暦	作　者	地　図　名	経線	基準	備　考
1595		オルテリウス	日本図	○	A	京都が153度
1644		北条氏長	正保日本図	-	-	北海道・樺太・千島を始めて表示
1646		カルディム	日本殉教精華日本図	○	A	京都が177度
1719		建部賢弘	享保日本図	-	-	
1740		ケンペル	日本誌・日本図	○	A	京都が165度
1754	宝暦4	森幸安	日本分野図	△	K	経線に数値はないが京都を通る
1779	安永8	長久保赤水	日本輿地路程全図	△	K	経線に数値はないが京都を通る
1785	天明5	林子平	三国通覧図誌付図	○	A	京都が166度
1792	寛政4	司馬江漢	地球図	○	A	日本は160－170度の間
1794	寛政6	桂川甫周	北槎聞略付図	○	A	日本は145－160度の間
1800	寛政12	伊能忠敬	蝦夷地小図	△	Y	経線に数値はないが江戸を通る
1802	享和2	伊能忠敬	奥州蝦夷中図	△	Y	経線に数値はないが江戸を通る
1804	文化元	伊能忠敬	東日本沿海地図	△	Y	経線に数値はないが江戸を通る
1807	文化4	伊能忠敬	近畿中図	○	K	はじめて「京都中度」を明記
1809	文化6	高橋景保	日本輿地図藁	○	K	九州は推定
1809	文化6	高橋景保	日本辺界略図	○	K	伊能間宮図を正距円錐図法で表現
1809	文化6	間宮林蔵	樺太島図	△	-	経線に数値はないが京都基準らしい
1810	文化7	高橋景保	新訂万国全図	○	A,K	日本京師為心図を付ける
1811	文化8	山田聯	北裔図説付図	○	A	日本は145－160度の間
1813		クルゼンシュテルン	世界周航記	○	E	日本は129－143度の間
1821	文政4	伊能忠敬ほか	大日本沿海輿地全図	○	K	
1826	文政9	高橋景保	蝦夷図	○	Y	「東都初度」を明記
1827	文政10	高橋景保	カタカナ日本図	○	K	シーボルトに贈ったもの
1832		シーボルト	「ニッポン」付図	○	K	「日本辺界略図」を翻訳したもの
1840		シーボルト	日本国地図	○	K,E	日本は129－143度の間
1854	嘉永7	新発田収蔵	蝦夷接壌全図	○	E	北海道が約160度
1860	安政7	松浦武四郎	北蝦夷山川地理取調図	○	K	稚内が東6度となっている
1862		英国水路部	日本・朝鮮近傍沿海図	○	E	
1863	文久3	幕府外国掛	小笠原総図	○	E	母島が東経142度
1865	慶応元	新発田収蔵	大清一統図	○		北京を中度とする
1867	慶応3	勝海舟	大日本国沿海略図	○	E	日本・朝鮮近傍沿海図の翻訳
1867	慶応3	幕府開成所	官版実測日本地図	○	K	伊能図に小笠原諸島を加えたもの
1871	明治4	川上寛	大日本地図	○	T	首都移転に伴い東京基準となる
1877	明治10	高橋不二夫	小学必携日本地図	○	E	
1877	明治10	陸軍参謀局	大日本地図	○	T	
1883	明治16	内務省地理局	大日本全図	○	T	
1884		グリニッジ国際標準子午線を採択				
1885	明治18	内務省地理局	２万分の１迅速図	○	E	

経線　－ 経線なし、△ 経線はあるが数値がない、○ 数値入りの経線あり
基準　A 大西洋基準、E 英国基準、K 京都基準、Y 江戸基準、T 東京基準

都を基準とした子午線が引かれ「中度」と明記された。

第六次測量を終え、一八〇九（文化六）年に高橋景保がまとめた「日本輿地図藁」は京都標準子午線をはじめて日本全図に適用させた暫定図であり、九州だけが未測量のため南北に長い形に描かれている。

第七・八次測量（九州）、第九次測量（伊豆諸島）、第一〇次測量（江戸府内）を終えて、伊能の死後、一八二一（文政四）年に完成した「大日本沿海輿地全図」は、北海道から九州まで（伊豆諸島は青島まで）をカバーするものであり、ここでも京都標準子午線が採用されている。

なお北海道に関しては、伊能忠敬は一八〇〇（寛政一二）年にニシベツまでの測量をしたのみであり、その後は間宮林蔵があとを引き継いで内陸部を含む詳細な測量を行っている。

間宮林蔵は一八〇八－〇九（文化五－六）年、樺太・東韃を探検し、「樺太島図」を残しているが、経線はあるが数字は読み取れない。稚内との位置から想像すると京都標準子午線を用いているようである。

佐渡出身の探検家、新発田収蔵が一八五四（嘉永七）年に著した「蝦夷接壌全図」では、すでに英国標準子午線が用いられ、北海道は東経一六〇度付近に位置付けられている。

北海道の名称の生みの親でもある松浦武四郎は、一八六〇（安政七）年に著した「北蝦夷山川地理取調図」中に、北海道・樺太の詳

細な地図を残しているが、これは稚内が東七度であることから、伊能忠敬の京都標準子午線を踏襲したものと思われる。

三、伊能図以後の標準子午線

一八〇九（文化六）年に高橋景保がまとめた「日本辺界略図」は、伊能忠敬・間宮林蔵の測量成果を、北東アジア図の中に位置づけたものであり、正距円錐図法を用いている点が伊能図とは異なっている。「日本辺界略図」は、一八三二年シーボルトが出版した「ニッポン」の付図として翻訳紹介されており、京都標準子午線がそのまま海外に紹介されたものとしては唯一のものである。樺太と大陸の間の海峡が「間宮海峡」と呼ばれるようになるには、この図が貢献している。なお、シーボルトは同書の中で、伊能図をメルカトル図法に直した「日本図」を紹介している。ここには京都標準子午線が引かれ、数値は京都基準と英国基準の両方が示されている。

また一八一〇（文化七）年に高橋景保が発表した「新訂万国全図」は、伊能・間宮の成果を日本人の手で世界図に盛り込んだもので、万国全図は伝統的な大西洋基準の子午線を用いているが、付図「日本京師為心図」として京都を中心にした半球図を載せているのが興味深い。

一八六一年に日本近海の測量に来た英国の測量船アクティオン号に渡された伊能図（小図）は、英国海軍水路部によって「日本・朝鮮近傍沿海図（一八六三）」としてメルカトル図法に改められ、さらに経度の歪みを修正されて出版された。この地図には「日本政府の地図からの引用」という断わり書きがつけられたが、京都標準子午線はなくなり、英国標準子午線のみが記されている。勝海舟の「大日本国沿海略図（一八六七）」は、これを逆輸入したものであるため、当然ながら英国標準子午線のみである。

開国以後、江戸幕府は積極的に欧米の技術をとりいれるようになり、一八六三（文久三）年に江戸幕府の外国掛が咸臨丸によって測量した「小笠原島総図」には英国標準子午線が用いられている。

伊能図の京都標準子午線が最後に使われたのは、一八六七（慶応三）年に幕府開成所から発行された「官版実測日本地図」である。これは北海道から九州までの伊能図に、外国掛が測量した小笠原島総図を加えたものであり、シーボルト事件以降、伊能図の非公開を貫いてきた幕府がはじめて印刷物として公開したものである。

これ以後の日本地図は、どれも伊能図を参考にして樺太、千島列島、琉球列島などを加えたものだが、京都標準子午線は使われていない。一八七一（明治四）年に川上寛が作成した「大日本地図」、一八七七（明治一〇）年に陸軍参謀局が作成した「大日本地図」、一八八三（明治一六）年に内務省地理局が作成した「大日本国全図」は、東京標準子午線を採用している。また一八七七（明治一〇）年に高橋不二雄が作成した「小学必携日本地図」は、伊能図をメルカトル図法に直したもので、英国標準子午線を採用している。

一八八四年に英国のグリニッジを基準とする国際標準子午線が採択されてからは、英国標準子午線以外はみられなくなる。一八八五（明治一八）年に内務省地理局が作成した「二万分の一迅速図」も英国基準の標準子午線を採用している。

四、経度測定の努力と失敗

伊能図における標準子午線の変化を見ると、第四次測量以前の成果をまとめた「蝦夷地小図（一八〇〇）」から「東日本沿岸地図（一八〇四）」までは、測量の基点である江戸を基準とした標準子午線を採用している。江戸を基準とした理由は、公儀測量御用として実施した測量であったという理由よりはむしろ、測量の出発点が江戸深川黒江町の伊能宅（または浅草の幕府天文方暦局）であった、という実際的な理由によるものと思われる。

第五次測量（一八〇四－〇五）から、伊能忠敬は公儀天文方の肩書きで、公費による測量ができるようになった。伊勢・鳥羽ではあわせて一六泊し、経度を求めるため、垂揺球儀、測食定分儀などを使って、木星の衛星食の観測を、江戸、京都と同時に行った。日の出から日没までを六刻とする不定時制を用いていた時代にあって、標準時という概念もな

く、正確な時計もなく、江戸や京都と連絡をとるにも電話もないという条件の下で、同時天体観測をしようとしたのであるからそれだけでも頭が下がる。木星の衛星食の観測には、四つのガリレオ衛星の識別、太陽・地球・木星・衛星の位置関係による食の進行過程の違いなど、相当な天文学的知識を必要とするが、どのようにして観測し、その結果をどのように地図に反映させようとしていたのか興味は尽きない。

渡辺（一九九七）は、日食・月食を利用して経度を測定しようとした伊能隊の観測結果について、「測量期間中に起こった日食は四回、月食は九回であった。合計一三回、同時観測を試みたことになるが、いずれかの観測地点の天候が悪いと成立しない。（中略）結局、データとして利用できたのは二ケ所のみであった。これでは経度の観測は不成功に終わったとみてよい。」と評価している。

また荒井（一九七九）によれば、一八一〇（文化七）年の江戸滞在中、伊能忠敬から天測による経緯度測定法を伝授された間宮林蔵が、翌一八一一（文化八）年、ロシア海軍ゴローニン少佐抑留を聞き、松前奉行所に彼をたずねた時の対話が、ゴローニン著「遭厄日本紀事」として高橋景保によって翻訳されている。その中で間宮はゴローニンに対し、「余は日の高さを測りて南北の緯度を弄するの法を知るも、月及び星の太陽を距るの隔りを測りて東西経度を知るの法を承知せざれば、願はくは教示せられん事を…」と経度測定方法を尋ねており、翻訳者の高橋もそれをかくさずに訳している事実は、伊能らが九州測量の時点にいたってもまだ経度の測定に成功していなかった事を物語っている。

五、京都標準子午線の採用の理由

第五次測量計画の成果として、一八〇七（文化四）年に作られた近畿中図には、伊能図としてはじめて京都標準子午線が引かれ「中度」と明記された。これを基準として、東側に「東一度」「東二度」…、西側に「西一度」「西二度」…という表記法が確定したのも、この時点である。これ以後の伊能図は、基本的にこの原則に従っている。

それではなぜ伊能図は、日本全図に江戸標準子午線ではなく、京都標準子午線を採用したのであろうか？

大谷によれば、伊能図の子午線は、京都西三條台旧改暦所跡を基準としているといわれ、その位置は京都市中京区の月光稲荷付近に比定されている。また京都を基準とした理由について海野は「幕府天文台が行う編暦事業ですら、天文台独自では発行することは許されず、平安朝以来の天文総本家土御門家の校閲が必要だったから、この度国家事業である総海岸線図に於ける本初子午線の決定に於ても、そのしきたりを守って同家に花を持たせたものと思われる」と説明している（井上一九九三）。

しかし私は、標準子午線を京都にもってきたのには、もっと合理的な理由があるような気がする。

その謎を説くには、「日本全図に江戸標準子午線を採用すると都合の悪い事は何か」ということを考えるのが近道である。それは子午線を引く際の図法の問題である。

伊能図は、いろいろと検討の末、サンソン図法に似た独自の図法を用いて、子午線を引いたといわれている。すなわち標準子午線を南北に引き、その東西の経線を北極点に向かって収束するように描いた。そのため、日本の中心部に標準子午線をもってこないと、東端や西端の経線がひどく傾斜してしまう。

その解決法として、もっとも合理的な方法が、日本の中心部にある重要な都市を基準にして子午線を引く事であった。京都を基準とすれば、北海道の根室付近が東一〇度、長崎の五島列島が西七度となり、左右の歪みは東西ほぼ均等にわけられる。

明治にはいってから川上寛（一八七一・明治四年）、陸軍参謀局（一八七七・明治一〇年）らが、首都移転に伴って東京を基準とする標準子午線を引いた日本地図を作成しているが、九州を通る経線はひどく傾いている。

高橋景保が一八二六（文政九）年に作成した「蝦夷図」では、「東都初度」という名称で、江戸標準子午線が用いられている。もしこれに京都標準子午線を書き込むと、すべての経線が斜めとなってしまう。そこで景保は、江戸を基準とした標準子午線を引く事で、根

室付近も「東六度」におさめた。

この事実は高橋景保らが、京都に標準子午線を引くということにはこだわらず、子午線の歪みを少なくするため、合理的な基準を選んでいたことを示すものであろう。

六、京都標準子午線の意義と問題点

保柳（一九七四）は、「忠敬はサンソン・フラムスチード図法と同じ図法によって地図を描いたといっては、誤りになる…忠敬は経線をあとから計算によって記入したのであり、図紙面上の経緯線に基づいて地図を描いたのではない」としている。

たしかに「東日本沿岸地図（一八〇四）」では江戸を通る子午線が男鹿半島を通過しているのに対して、「大日本沿海輿地全図（一八二一）」では飛島付近を通過しており、日本全図を作るにあたり、標準子午線を京都に移動した際に、経線にあわせて地図を修正するということは行われていない。

高橋至時は、すでに一八〇三（享和三）年の段階で、経緯線が斜交することの問題を感じ、間重富への書状の中で緯線を曲線にした円錐図法のような地図投影法を提案している。しかし伊能忠敬はこの理論を理解はしたものの現地での測量を優先している（保柳一九七四）。ところが、翌一八〇四（文化元）年には至時が四〇才という若さで病死してしまい、地図投影法をきわめるチャンスを逸してしまった。

伊能忠敬も測量が一段落すると、この問題をなんとかしたいと考えるようになり、一八一五（文化一二）年頃から経緯線の新表現に関する独特な計算にとりくみ、「一里六分図東西之経度并自北極下国直円経差」をまとめたが、一八一七（文化一四）年には自ら病床につくようになり、翌一八一八（文政元）年に八丁堀の自宅で死去した。そのため円錐図法にもとづいた伊能図はついに実現しなかった。

伊能図によって用いられた京都標準子午線は、一八〇七－一八六七年のわずか六〇年間しか用いられなかったが、英国のグリニッジを基準とした国際標準子午線が採択される前の時代にあって、「日本列島を地球表面上になるべく歪みのない状態で投影する」というきわめて先進的な試みであった。この時代に、自分の国の位置（緯度経度）と形（海岸線）を、自らの力で地球の座標の上に位置付けることができた国は、欧米列強諸国をのぞいてはほとんど存在しない。伊能図のすばらしさは、日本で初めての実測図であったというだけでなく、最初から地球上の座標を意識して、地上での測量に加え、数多くの天測を行って作られた地図であるということである。残念ながら経度の測定には成功せず、東日本が実際よりも東に偏しているという大谷の批判があるが、当時の我が国の科学力を考えれば、最大限の努力をした結果であるといえよう。

本稿をまとめるにあたって、都立大学の都民カレッジにおいて、渡辺一郎先生、佐久間達夫先生の御指導をいただいたことを、深く感謝申し上げます。

（参考文献）

大谷亮吉（一九一七）『伊能忠敬』 岩波書店
海野一隆他編（一九七二）『日本古地図大成』 講談社
保柳睦美（一九七四）『伊能忠敬の科学的業績』 古今書院
荒井庸夫（一九七九）『間宮林蔵～日本測地学の先達』 筑波書林
佐久間達夫（一九八八）『伊能忠敬の測量日誌』
井上義太郎（一九九三）『伊能図における中度と小浜』 福井高社研紀要第25号
日本国際地図学会監修（一九九五）『大日本沿海実測図～伊能中図』 武揚堂
渡辺一郎編著（一九九五）『英国にあった伊能忠敬の日本全図』 日本古地図学会
渡辺一郎（一九九七）『幕府天文方御用～伊能測量隊まかり通る』 NTT出版
伊能忠敬研究会（一九九八）『忠敬と伊能図』 アワプランニング
東京地学協会（一九九八）『伊能図に学ぶ』 朝倉書店

（よしだ　まさひと・日本自然保護協会保護研究部）

舞台劇「伊能忠敬物語」の上演

渡辺　一郎

十二月十日から二七日まで東京の新国立劇場において、俳優座の舞台劇「伊能忠敬物語」が上演されました。朝日新聞と俳優座の共催で、伊能忠敬研究会と日本歩け歩け協会、佐原市、などが後援しました。

劇団俳優座がかなり前から温めていたテーマで、研究会が主導した江戸東京博物館の「伊能忠敬展」の計画決定をキッカケとして約三年の準備ののち実現したものです。伊能ウォークを始めとする静かなる伊能ブームのお陰で満員の盛況でした。上演期間中の総席数二万席のほとんどが初日前に売り切れました。小渕総理も十二月十八日の夜の部を夫人同道で観覧されました。これまで伊能忠敬は地味なので芝居や映画にはなり難いとされてきましたが、今回の成功でイメージがすっかり変わることを期待しています。

ドラマは二幕に分かれていて、第一幕は佐原時代の名主・忠敬でした。浅間山の噴火による降灰対策、利根川の水防作業を指揮する忠敬、天明の飢饉の際の窮民の救済と、それを支える妻・達(みち)や、息子・景敬たち家族の協力を演ずる。

第二幕は江戸に出て高橋至時の弟子となり、浅草・深川で緯度一分の長さを歩測したのをキッカケとして、蝦夷地測量に旅立つまでをコミカルに見せる。

江戸博の「伊能忠敬展」に世田谷の伊能家から初めて公開した黒江町・浅草測量図をもとに、こんなやりとりがあって蝦夷地測量へと話が進んだのではないかというストーリーである。拙著「伊能測量隊まかりとおる」で詳しく取り上げたから会員諸兄姉には周知の事柄であるが、舞台劇として眺めるとあらためて、実際にあらすじは、このような展開だったのではないかと感じさせられる。

フィナーレの測量のイメージについては、作業中の指揮・号令はどんなものだったかについて演出家から相談を受けていた。記録はないので「たぶんこんなものだったのでは」という処を知らせておいたが、デフォルメされ、イメージ画面としては、良くまとまっていたとおもう。実際に伊能ウォークを歩いている人達から、自分と重ね合わせて感動の言葉が聞かれた。

ストーリーのなかでの、ドラマ性を強めるためのフィクションは、娘「しの」を狂死させたこと、息子・景敬を測量出発前に海難死させたこと、侍でないから測量の許可が出ないとしたこと、などである。

「しの」のことは史実的に余り分かっていないが、幸せが薄かったらしいから、まんざら違っているとも云えない感じである。最初の脚本ではもっと気の毒に描かれていたから、かなり改善されている。

景敬の死は実際には九州第二次測量中で、忠敬の落胆を恐れて病没はしばらく知らされなかった。忠敬にとってたいへんな不幸であったことに変わりはない。

侍ではないから許可が降りなかったという部分も、実際とは少し違っている。幕府で蝦夷地測量をさせるということはきまったが、費用の関係とか、北辺多事のため奥州街道の往復が多く、人馬の負担を街道

筋にかけたくないといった内部事情で遅れていたようである。

しかし、いっぽうで百姓身分の者に旅行中人馬を支給する証文を渡したことは無いというような論議もあったから、分かり易く侍でないから駄目だとしてもいいだろう。史実では忠敬はこのとき、領主の津田家からは苗字帯刀を許されていたから、測量の許可証には元百姓で浪人と書かれている。

津田家の領内では侍の身分であったことは確かである。しかし、これは他領には通じなかったらしい。測量を始める前に佐原における忠敬の功績を列挙して箱訴が行われたのは事実である。仕掛け人は劇のように景敬だった。後に箱訴の費用六〇余両は祝儀として伊能家から渡されている。

村役人が幕府・勘定奉行に呼び出され、奉行直々の吟味があって、幕府から苗字帯刀を許されるのは第一次測量を終わってからであった。第二次測量以降は全国的に通用する侍の身分になり、先触れは勘定奉行から幕府代官を通じて伝達されたから、趣旨においてはそう大きな違いではないだろう。

全体をとおしてみたとき、五〇才まで事業家として、名主として、家業と村政に尽力して成功したあと、破天荒な仕事に乗り出す経過がよく演じられて観客に深い感銘を与えている。私も関係者という立場上、意外な方からお電話をいただいた。心に迫るものがあったのであろう。

研究会の佐原支部ではバスを仕立てて大挙して観劇会に参加いただいたし、横芝町、九十九里町からもバスで大勢上京していただいた。佐原、九十九里の人達にとってはまことに心地よい舞台劇だったとおもう。

ただ、研究会の立場で欲をいうならば、佐原のウエイトが高すぎたと考えている。忠敬を育てたのは佐原なり、横芝であったことは確かである。しかし、佐原の業績だけだったら忠敬はこんにち、これほど特筆するに値しない。

佐原の忠敬が江戸に出たことによって、ひとりでに測量家・忠敬に変身したのではなく、偉人ではない普通人・忠敬の江戸における地道な勉学と熱心な観測、測量などの活動が、彼に緯度一度の実測あるいは日本全国の測量という幸運をもたらしたものである。伊能図を残したから現在の名声があるのである。いわば忠敬は、佐原あるいは千葉の地方区ではなく、全国区だから多数の人々の感銘を呼ぶのである。難しいことではあるが、もう少し測量とのかかわりと測量風景を描いて欲しかったとおもう。

○加藤剛の楽屋に伊能忠敬研究会から楽屋花を献呈

新国立劇場では玄関に花を並べることは禁じられていますので、主演の加藤剛さんの楽屋に楽屋花を献呈しました。

○研究会の事務室移転

伊能忠敬研究会の事務局が同じ飯田橋ハイタウンの中ですが、今度移転しました。これまで五階の五〇四号室でしたが、六階の六一八号に代わりました。少し広くなりましたので、数人の打ち合わせくらいはできるようになりました。電話などは従来のとおりです。

ボランティアで研究会の会務をお手伝いいただける方を募ります。古文書解読から史料調査、発送、整理、編集補助など庶務的な仕事があります。多少なりと時間をさいていただける方連絡をお待ちします。

◆◆◆ お知らせ（二〇〇〇年の行事案内）◆◆◆

一、伊能ウォークへ参加のお願い

左の場所には役員が出かける予定です。出迎え、見送りなど若干のウォークとあと観光、懇親会など開きたいと考えます。参加される方は御連絡下さい。

1・26　大阪出発式前夜　関西支部懇親会　渡辺、伊能、安藤出席。
1・27　大阪出発式　渡辺、伊能、安藤　出席。
「伊能図展」あり。渡辺解説。
2・8　赤穂　出迎えと出発式、赤穂見学。　渡辺他一九名予定。
4・9　松山　伊能。
4・22　広島大会　斉藤。
5・13　福岡　石川支部長、渡辺、伊能。
5・25　福江、平戸・長崎　伊能、安藤。
福江では坂部の墓前祭をやります。
8・24　沖縄（名護）芳賀。（那覇）伊能。
10・29　松江　芳賀。
11・12　宮津、関西支部。
12・4　名古屋　担当未定。
12・17　静岡　担当未定。
12・30　川崎　前夜祭　時間のある役員は全員参加。
1・1　東京帰着行進。到着式。参加者三〇〇〇人以上の見込み。
参加可能な会員は全員参加して下さい。時間は午前中の適当な時間が選ばれる見込みです。

○伊能ウォーク大会開催地と伊能測量のかかわり

大阪　中国沿海を測った第五次測量の往路、四国に渡った第六次測量の往復に立ち寄った。第五次測量では一二日間滞在して、町内測量、師匠高橋の恩師・麻田剛立の墓参、問宅訪問、知友に表敬、社寺参詣などをおこない、徳島藩蔵屋敷で接待をうける。

神戸　摩耶山に登り山々を測る。広厳寺で楠公の書を見て生田神宮に寄る。楠公の碑を地図に書くため、碑の前で諸方の山々を測る。

姫路　第五次測量の途次、須磨寺霊宝拝見（一八〇五・一一・二八）、高砂の相生の松を見（一二・二）、曾祢天満宮に参詣（一二・四）して姫路城下着（一二・六）。姫路藩の船で家島諸島に渡る（一二・九）。

岡山　第五次測量の文化二年一二月一日（陽暦一八〇六・一・二〇）から四六日間滞在し、越年して測量下図の整理などをおこなう。出立の途中、吉備津彦神社、吉備津神社に参詣。

倉敷　いまはない児島湾の内外を下津井岬まで測る。

高松　東廻りで四国一周のあと丸亀から金比羅神宮に詣り、塩飽諸島を測って高松着。小豆島を測量したあと高松にもどり、屋島で源平合戦の史蹟を探訪。高松では師匠・高橋至時と同門の久米栄左衛門が測量案内する。

二、史料の収集

朝日新聞の事務局と協力して、伊能ウォークのルート上の忠敬の宿泊市町村に史料と地図の発掘を依頼します。

三、会報運営

会報は新年度から巻頭に述べたような形で発行の予定です。

1．「伊能忠敬研究」

原稿締切り　四、八、一二月
発行　六、一〇、二月
編集長　芳賀　常任理事

●体　裁　四〇頁　表紙と本文は同一用紙とする。
一色刷り　印刷五〇〇部

●内容構成　二〇〇〇年の予定。

（項　目）	（執筆者またはとりまとめ者）	（頁数）
会員発表　一篇	（編集長）	四頁
連載記事　四篇		
1 佐原伊能家文書	（小島）	六頁
2 忠敬江戸日記	（佐久間）	六頁
3 世田谷伊能家文書	（伊能・安藤）	八頁
4 地域史料		四頁
忠敬史蹟案内	（斉藤）	二頁
伊能図関係・地図と論文	（清水・芳賀）	八頁
表紙　写真（地図と解説）		一頁
裏表紙　ニュース短信・編集後記		一頁

2．「かわら版・伊能忠敬研究」

原稿締切り　二、六、一〇月
発行　四、八、一二月
編集長　斉藤　仁

●体　裁　一六頁　年三回発行　表紙本文同一用紙。
一色刷り　印刷五〇〇部

●内容構成　当面の予定。逐次見直し。

一般記事（投稿可）	四頁
伊能忠敬Q&A	二頁
会員の頁　七〇〇字×八人	二頁
東京支部　ニュース等　（渡辺）	一頁
佐原支部　同　（香取）	一頁
関西支部　同　（原田）	一頁
九州支部　同　（石川）	一頁
各地のたより　同　（伊能）	一頁
お知らせ	一頁
表紙　写真　他	一頁
裏表紙　編集後記	一頁

3．ホームページ、名簿担当　大友常任理事

ホーム頁掲載用に情報を送り込んで下さい。今年は関連するホーム頁のリンク集を作るとのことです。会員のプロフィールを掲載した二〇〇〇年 会員名簿を企画しています。御協力をお願いします。

4．会員プロフィール用原稿提出のお願い

会員名簿にお仕事、興味分野、専門など何となく書いてありますが、本人の言葉で一〇〇字以内のプロフィールをお願いします。会員が全国的に分布していて、なかなか一堂に会することは出来ません。紙上での御挨拶お願いします。字数は厳守です。

入会案内

「伊能忠敬研究会」は次のような活動を行います。

① 本会報の発行　年三回　　交流誌　年三回。

② 例会の開催　講演会、発表会、各種史料、伊能図の展示説明会、見学旅行などの例会。

③ その他、伊能忠敬に関連するさまざまな事業。

入会方法

住所、氏名、職業、関心分野、電話、ファックス番号を通信欄に記載の上、郵便振替にて入会金四千円、年会費六千円を「郵便振替口座〇〇一五〇・六・〇七二八六一〇　伊能忠敬研究会」あてにご送金下さい。

投稿規定

●会員の投稿を歓迎いたします。原則として一回の掲載は四頁以内とし、越える場合は分載します。原稿多数の場合、採否は編集委員にお委せねがいます。また、編集委員から一部変更をお願いする場合があります。

●一頁は、二段組三一字×二六行×二段で一六一二字、三段組二〇字×三〇行×三段で一八〇〇字です。タイトルと写真はこの中に含めてください。また、提出した原稿は必ず控えをおとり下さい。返却は致しかねます。

●伊能忠敬研究会・ホームページ　　担当　大友正道

URLは、http://www2s.biglobe.ne.jp/～auto/inoh.html

*本誌の編集委員は次のとおりです（五〇音順）

安藤由紀子（元国会図書館憲政資料室）・伊能陽子（伊能家）・香取禧良（元佐原市教育委員会次長）・小島一仁（佐原市史編纂委員長）・齋藤仁（学習院女子大）・佐久間達夫（元伊能記念館館長）・清水靖夫（法政大学講師）・芳賀啓（柏書房代表取締役）・渡辺一郎（㈱サンコミュニケーションズ取締役会長）

編集後記

●伊能ウォーク隊を、深川の富岡八幡宮で見送った感激について、昨年冬号の編集後記に書いたのは、ついこの間のことに思えたり、遠い昔のような気がしたりしています。

正直なところ「がんばって！」と手を振ったものの、その時の私には、伊能ウォークがどんな展開になるのか全く予想出来ませんでした。

とにかく無事に一年目が終わり、何回か一緒に歩いたほんとにささやかな体験のお陰で、私の心には豊かな感動が残っています。

いよいよ二年目、本部隊の方々、伊能ウォークを支えている各方面のサポーターの皆様に、改めてエールを送ります。

●俳優座「伊能忠敬物語」公演を研究会会員とそのご家族、友人知人約五百人が観劇。遠く函館、岩手、新潟、京都、鳥取などからの会員の方も含め、初めてお会いする方々とも親しくお話し出来たのも、嬉しいことでした。

●はじめての『伊能忠敬研究』をお届けしたのが、一九九六年の春。四度の春夏秋冬を巡り、この冬号が十六冊目になります。無理なお願いを快諾して、貴重な文章を賜りました諸先生方、熱心な研究論文をお寄せ下さった会員諸氏、いつも暖かく応援して下さった皆様方のお陰と感謝の念で一杯です。

●次号から、『伊能忠敬研究』は新しいスタイルになり、また気を入れ直してスタートします。今まで以上にお力をお貸し頂きたいと願っております。

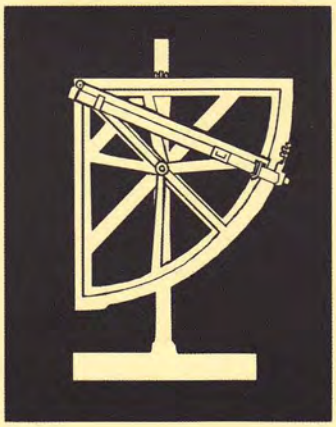
（伊能）

「伊能忠敬研究」第22号　©　2000年1月31日印刷　2000年2月3日発行
発行所　〒162—0822　東京都新宿区下宮比町2の28の504　伊能忠敬研究会　Tel & Fax 03-3268-9228　編集発行人　渡辺　一郎

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.22 Winter 2000



ESSAY

Action Planning in this year ..... WATANABE Ichiroh 1

STUDY NOTES 1

EGAWA'S Letter and Surveying in Izu 2 ..... NAKADA Masayuki 2

MATERIALS

Reading Documents in Sawara, 4 ..... KOJIMA Kazuhito 6

Family Document 15

TAKAHASHI Yoshitoki & HAZAMA Shigetomi ..... ANDOH Yukiko 10

INOH'S Diary in Edo 2 ..... SAKUMA Tatsuo 15

STUDY NOTES 2

Documents of Jimbo Family ..... KATOH Tokio 19

Colour Materials of INOH-Zu ..... ASAI Kyoko 22

The Kyoto Meridian of INOH-Zu ..... YOSHIDA Masato 24

A Drama "INOH Tadataka" ..... WATANABE Ichiroh 30

Action Information 32

OTHER NEWS 33

Edited and Published

by

THE INOH TADATAKA SOCIETY